

高槻市

梶 原 古 墳 群 2

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

公益財団法人 大阪府文化財センター



6 溝（北から）



出土遺物

序 文

大阪府の北東部に位置する高槻市は、北の北摂山地と南の淀川にはさまれた台地や沖積地を中心に発展してきました。大阪と京都のほぼ中間地点に位置することから、高度経済成長期以降、ベッドタウンとして人口が急激に増加し、今日では人口 35 万人を有する中核市となっています。市内には、古代の山陽道・近世の西国街道が東西を横断し、街道沿いに発展をとげ、淀川は三十石船などによる水運の要所となっていました。そして現在では、名神高速道路、JR 東海道新幹線、JR 東海道本線、阪急電鉄京都線、国道 171 号がその役割を担っています。

大阪府文化財センターでは、関係各位の協力のもと、平成 22 年度から新名神高速道路建設に伴う埋蔵文化財調査を実施しており、現在は八幡京田辺 JCT 一高槻 JCT 間の発掘調査と整理作業に取り組んでいます。開通後には、高槻市域は既存の名神高速道路と新名神高速道路が交わるため、新たなネットワークの形成によってさらなる発展が期待されるところです。

今回報告する梶原古墳群は、1990 年代の名神高速道路の拡幅工事に伴う事前調査により 18 基の古墳が調査され、そのうち D-1 号墳からは金銅装の馬具が出土し、注目されました。今回の調査は、これまで古墳の分布が知られていた範囲からやや離れたところで試掘調査を実施し、埴輪等が確認されたことから周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲拡大を受け、実施したものです。結果、これまで存在が知られていなかった 5 世紀後半の古墳の痕跡と思われる溝を確認し、埴輪や須恵器が出土しました。梶原古墳群の理解を深めるばかりではなく、周辺で調査が進んできた集落遺跡の評価にも関わる貴重な成果と考えられます。こうした埋蔵文化財の調査成果が有効に活用され、地域の歴史像や各時代の社会像をあきらかにするための一助となることを、切に願います。

最後になりましたが、今回の事業の実施にあたってご理解・ご協力を賜りました、西日本高速道路株式会社関西支社、大阪府教育庁文化財保護課、高槻市街にぎわい部文化財課、地元関係各位に厚く御礼申し上げる次第です。今後とも大阪府文化財センターの事業により一層のご理解とご協力を賜りますよう、なにとぞよろしくお願ひ申し上げます。

令和 4 年 10 月

公益財団法人 大阪府文化財センター

理事長 坂井 秀弥

例　　言

1. 本書は、高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴い実施した大阪府高槻市梶原古墳群の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査と整理作業は、西日本高速道路株式会社関西支社新名神大阪西事務所から委託を受け、公益財団法人大阪府文化財センターが、大阪府教育庁文化財保護課の指導のもと実施した。現地調査は令和4年1月から令和4年4月まで行った。引き続き中部調査事務所において令和4年5月から令和4年7月まで整理作業を行い、令和4年10月31日に本書の刊行をもって完了した。

3. 発掘調査および遺物整理作業に関する受託事業名と事業契約期間は下記の通りである。

〔現地調査〕【事業名称】高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（高槻市域）
その13【事業契約期間】令和3年11月16日～令和4年5月25日

〔整理作業〕【事業名称】高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理（高槻市域）その5【事業契約期間】令和4年5月2日～令和4年10月31日

4. 発掘調査および遺物整理は下記の体制で実施した。

事務局次長 市本芳三、総務企画課長 亀井 聰、調査課長 岡戸哲紀（令和3年度）・佐伯博光（令和4年度）、課長補佐 佐伯博光（令和3年度）・後藤信義（令和4年度）、主査 森本 徹（調査・整理担当）

5. 本書に掲載した写真の撮影は、遺構は森本が、遺物は中部調査事務所写真室が行った。

6. 本書の執筆および編集は森本が行った。

7. 発掘調査ならびに報告書の作成過程において、下記の方々からご指導・ご協力を賜った。記して感謝いたします。

山上 弘・原田昌浩（大阪府教育庁文化財保護課）、早川 圭・今西康宏・矢野昌史・小平梨紗（高槻市街にぎわい部文化財課）、森田克行・内田真雄・三好祐太郎（高槻市立今城塚古代歴史館）、河内一浩（順不同、敬称略）

凡　　例

1. 遺構図および断面図に示した標高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用している。図中の標高は、すべて東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値であり、T.P.十は省略した。

2. 座標値は世界測地系（測地成果2011）による平面直角座標系第VI系に基づく。単位はすべてmであり、mは省略した。

3. 全体図および遺構実測図の方針は、いずれも平面直角座標系第VI系の座標北を示す。なお、真北は東に0°16'24"、磁北は真北に対し西に7°17'傾く。

4. 現地調査および遺物整理に際しては、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠した。

5. 土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006年度版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・

財団法人日本色彩研究所色票監修を用いた。土層の記載方法は、記号・土色名・土質名の順とする。

6. 遺構番号は、遺構種類に関わらず1から順に付し、遺構番号—遺構名として表現した。

7. 遺構実測図における断面位置は、図面上に「▶◀」によって示した。掲載縮尺は統一していない。

8. 遺物実測図の縮尺は、4分の1を基本とするが、大型土器は5分の1、石製品等小型のものは2分の1で掲載した。

9. 掲載遺物は、通し番号を付し、本文・挿図・写真図版ともに一致する。掲載遺物番号は1～53である。

10. 引用文献および参考文献は本文末にまとめた。

目 次

巻頭原色図版

序 文 ・ 例 言 ・ 凡 例 ・ 目 次

第1章 調査に至る経緯と調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3節 既往の調査成果	4
第3章 調査の方法	8
第4章 調査成果	11
第1節 地形と基本層序	11
第2節 遺構と遺物	13
第5章 総括	26
一覧表（1. 遺構一覧表 2. 遺物一覧表）・写真図版・抄録・奥付	

挿 図 目 次

図1 新名神高速道路計画路線図と埋蔵文化財調査地点	1	図9 1～5焼土坑 平・断面図	16
図2 淀川北岸東部地域遺跡分布図	5	図10 6溝 平・断面図	18
図3 梶原古墳群 既往調査成果合成図	7	図11 6溝 遺物出土状況	19
図4 調査区地区割図	9	図12 古墳の復原と削平過程の推定	20
図5 現況平面図	10	図13 出土遺物（1）	22
図6 地形と基本層序	12	図14 出土遺物（2）	23
図7 全体平面図	14	図15 出土遺物（3）	24
図8 遺構分布範囲 平・断面図	15	図16 梶原古墳群の分布と変遷	27

写 真 図 版 目 次

図版1 調査地の景観	図版8 遺構
図版2 全景	図版9 遺構
図版3 全景	図版10 遺物
図版4 全景・層序	図版11 遺物
図版5 遺構	図版12 遺物
図版6 遺構	図版13 遺物
図版7 遺構	図版14 遺物

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

昭和44年（1969）に全線開通をみた東名・名神高速道路は、関西圏・中京圏・首都圏を結ぶ基幹的な高速道路として重要な役割を担っているが、自家用車の普及や自動車輸送の活発化により渋滞・交通混雑が慢性化してきた。また自然災害による被害や設備の老朽化への対応など、バイパス的な役割をもつ道路の必要性は一層増している。国ならびに西日本高速道路株式会社はその対策の一部として、大阪府内においては新名神高速道路の新設などの事業を計画、推進している。その路線計画地は大阪府北部の、枚方市、高槻市、茨木市、箕面市にわたるもので、計画路線内には周知の埋蔵文化財包蔵地が多数含まれている。その取り扱いについては事業者である西日本高速道路株式会社と、工事の届出を受けた大阪府教育庁文化財保護課の間で協議が進められ、建設工事に先立つ埋蔵文化財の確認調査ならびに発掘調査実施が指示されることになった。これに従い、平成22年度（2010）の箕面市止々呂美地区をはじめとする確認調査以降、公益財団法人大阪府文化財センターが順次、発掘調査を実施している。

周知の埋蔵文化財包蔵地である梶原古墳群は、1990年代に実施された名神高速道路の拡幅工事に際し、名神高速道路内遺跡調査会により発掘調査が行われ、18基の古墳が確認された。また平成27年度（2015）には主要地方道伏見柳谷高槻線の拡幅工事に際し、公益財団法人大阪府文化財センターにより発掘調査が行われ、弥生時代末期の墳墓が確認されている。梶原古墳群の分布する丘陵のうち、本書報告範囲を含む路線予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外であったが、令和2年度（2020）に実施した試掘調査では、工事予定地南寄りの範囲で埴輪片が複数出土し、近辺に古墳の存在する可能性が指摘された。この結果を受け、令和3年（2021）11月、梶原古墳群の範囲を北東側に拡大する措置がなされ、令和3年度（2021）から令和4年度（2022）に埋蔵文化財の発掘調査を実施することとなった。

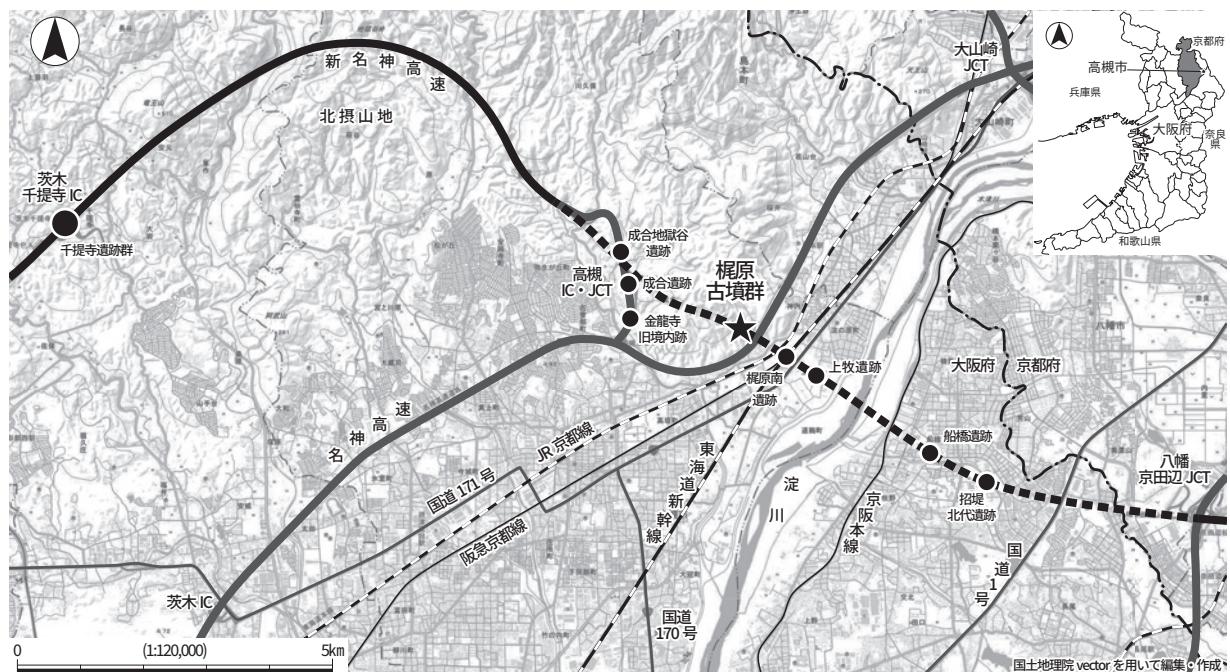


図1 新名神高速道路計画路線図と埋蔵文化財調査地点

第2節 調査の経過

現地での発掘調査は、令和3年（2021）11月16日から令和4年（2022）5月25日にわたる受託契約において実施した。また、令和4年5月2日から令和4年10月31日にわたる受託契約において、遺物整理事業と印刷・製本・発送を含む報告書作成事業を実施した。令和4年10月、本書の刊行をもって、梶原古墳群21-1調査に関わる一連の業務を完了した。

以下、試掘調査を含む作業経過を簡単に記載しておきたい。

令和2年度（2020）の確認・試掘調査は安満山山塊の西側にあたる高槻市成合地区と東側にあたる梶原地区の2か所において実施した。成合地区は事業地が周知の埋蔵文化財包蔵地である金龍寺旧境内跡の範囲に含まれていることから確認調査として、梶原地区は周知の埋蔵文化財包蔵地である梶原古墳群の隣接地にあたることから試掘調査として、令和2年10月～11月にかけて調査を行った。梶原地区では尾根地形の稜線主軸上に2本（1区・2区）、それに直交する形で尾根斜面に3本（3～5区）、いずれも幅1mのトレントを設け、調査面積は133m²となった。10月26日に2区・4区・5区の、10月27日に1区・3区の調査に着手し、11月5日にすべてのトレントの掘削、写真撮影、実測図の作成などを終了した。11月10日にトレントの埋め戻しを完了し、現地での試掘調査を完了した。11月4日には大阪府教育府文化財保護課の現地立会を受け、調査成果を報告するとともに調査完了までの作業指示を受けた。また、調査で出土した埴輪の評価のための資料調査として、11月27日に高槻市立今城塚古代歴史館に資料を持参し、学芸員より有益なご教示を得た。

試掘調査の結果を受けて実施することとなった調査予定範囲の現況は、竹林を含む山林であり、樹木が繁茂する状態であったため、全面調査の着手に先立ち、令和3年12月より樹木の伐開と伐木の除去が行われた。伐木の除去は令和4年1月11日までの期間を要し、完了後、現地調査に着手することとなった。試掘調査では古墳に関わる可能性の高い遺物の分布域は把握できていたものの、明確な古墳の有無はあきらかではなかった。このため、伐開後の現況観察等により、古墳ないしはその可能性のある地形が存在するならば、その位置や規模を把握したうえで調査方針を策定する必要があった。その助けとして、現況の空中写真測量を令和4年1月14日に実施した。これにより作成した現況測量図と現地観察により調査方針を策定し、1月19日に機械掘削に着手した。当初は機械掘削により全域の腐植土層や残根を除去したのち、人力掘削に移行する手順も想定されたが、現地が狭小な尾根稜線部分であり、急傾斜面や大型の根の周囲など、重機を用いた掘削が難しい箇所も多く、全域の機械掘削を行うことは難しい状況であった。また人力掘削で生じる堆土を移動させる手段が重機による運搬に限られたことから、機械掘削と人力掘削をほぼ並行して進めることとした。これら調査掘削の進行にあわせて遺構検出、遺構掘削、写真撮影、実測図作成などを随時実施し、令和4年4月15日に検出遺構面の空中写真測量を実施した。この間、令和4年4月14日には大阪府教育府文化財保護課の現地立会を受け、調査成果を報告するとともに調査完了までの作業指示を受けた。その後、遺構検出面下層の確認作業などを行い、令和4年4月28日に現地での調査を完了した。この間、令和4年4月18日には高槻市街にぎわい部文化財課、ならびに高槻市立今城塚古代歴史館職員の視察を受け、調査成果の評価に関わる有益なご教示を得た。なお、今回検出した古墳については、新規に梶原古墳群A-3号墳の呼称が付された。

現地調査終了後、令和4年5月から遺物整理作業と報告書作成作業を中部調査事務所において実施した。令和4年7月末日をもって報告書作成作業、資料収納作業を終了し、報告書の印刷・製本を行った。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

梶原古墳群は大阪府北部の高槻市に所在し、北に島本町、東および南に淀川をはさんで枚方市と接する、市域でも東端付近に位置する。現住所としては、高槻市梶原に含まれる北摂山地末端の丘陵域であり、調査地の標高は約80～90mとなる。現地からは東から南方向にかけての眺望は良好で、枚方丘陵から生駒山地、上町台地付近までを一望することができる。

今回の調査地周辺に関わる地形環境については高槻市史等において詳述されている（小林1977）、一部を引用しつつ、今回の調査地の地形環境を概観しておきたい。

大阪平野の北縁にあたる淀川北岸地域は、断層帯である有馬－高槻構造線を境に北側の北摂山系と南側の平野部に大きく二分される。この付近の北摂山系は標高700m弱のポンポン山を最高所とし、淀川沿いの平野に張り出す天王山や安満山、阿武山といった標高280m程度の山塊まで山地を形成している。これら山地を構成するのは主に砂岩、頁岩、チャートなど、丹波層群と呼ばれる古生層の岩石であり、部分的に花崗岩やホルンフェルスが貫入するとされる。これら山塊より派生する幾筋もの尾根が平野に接する部分は、有馬－高槻構造線を介することもあり、急峻な傾斜面をもつことも特徴である。梶原古墳群は安満山山塊から南に派生する幾筋かの尾根上に分布し、今回の調査地点は既往の調査で古墳分布が確認された標高30～50m程度の地点よりは上方にやや離れて位置することとなり、同じ尾根筋であってもその間には急斜面を介し、隔絶した立地となっている。また、地形環境とも関連し、尾根稜線部分は土壌の侵食作用が著しいようで、尾根上には細かな侵食谷が数多く認められるとともに、腐食土層直下に基盤層である頁岩の岩盤が露出しているところも多い。逆に尾根間の谷筋は深く、平野に流出する低位段丘付近では土石流堆積の痕跡が確認されている（鹿野2017）。

一方、断層帯より南側の平野部は、丘陵に取り付くようにして延びる低位段丘帶と沖積低地からなる。沖積低地は北東から南西方向に流れる淀川と、北摂山地から南流する安威川・芥川・檜尾川などの中小河川によって形成された平地であって、梶原古墳群周辺では上牧遺跡、井尻遺跡、梶原西遺跡、梶原南遺跡などの集落遺跡が調査されている。淀川と山塊が近く、平野域が狭隘なこの地域は、淀川はいうまでもなく、海と内陸、また大阪と京都を結ぶ交通インフラが集中する地域でもあり、その地理的な特質は古墳時代にまでさかのぼることが近年の調査であきらかとなりつつある（笹栗編2021）。

第2節 歴史的環境

梶原古墳群が位置する高槻市およびその東端付近に位置する梶原地区の歴史的環境については既刊の報告書にも詳しく（笹栗編2021など）、最新の調査成果を踏まえた集落と墓域を含めた総合的な検討も試みられている（笹栗2021）ので、ここで逐一繰り返すことは避け、今回の主な調査成果といえる古墳時代を中心とした、調査地周辺地域の動向に限って触れておきたい。

梶原地域では井尻遺跡や上牧遺跡で古墳時代前期以降の大規模集落の存在があきらかとなりつつある。おおむね庄内式土器段階ないしは布留式土器段階から続くものであり、各種手工業生産の痕跡や他地域産土器の出土などからみて、古墳時代開始前後の社会的な変化により出現した流通拠点的な居住域

群と考えられる。上牧遺跡では淀川ないしはその分流路に接した低地域に形成された複数の微高地上で居住域が確認され、庄内式段階から布留式段階にかけて集落が盛期を迎えるようである。その後、古墳時代後期にかけて集落は継続するが、古墳時代中期前半＝5世紀前葉頃にはやや衰退し、中期中葉＝5世紀中頃には再び活性化するとされる。後期前葉＝6世紀前半をもって集落は解体し、井戸遺跡を含め、平野部での居住域としての土地利用は低調となる。その後、山麓に位置する梶原寺が7世紀中葉に創建され、梶原瓦窯が操業を行う段階を経て、奈良時代中葉には梶原南遺跡で山陽道の駅家やそれに関連すると目される集落が形成される。

このような集落遺跡の消長に重なる時期の墳墓資料は、主に安満山山塊を中心とした丘陵域に分布する。古墳時代を通じて大型古墳の存在は知られていないが、梶原古墳群の一角で確認された弥生時代末期の梶原台状墓、青龍3年銘鏡を含む銅鏡5面を副葬した安満宮山古墳、腕輪形石製品を多量に副葬していた萩之庄1号墳などは古墳時代中期までの首長墓と目され、安満遺跡や上牧遺跡などの集落に関わる有力者の墳墓の可能性が高い。古墳時代中期段階の墳墓資料は、梶原古墳群に含まれる範囲で不時発見された埴輪円筒棺（森田 1981）や、安満山古墳群B－0号墳やC－1号墳のような後期群集墳に先行する時期の小規模墳（宮崎・富成 2001・鐘ヶ江 2002）などが知られるものの、全体的に希薄ではある。安満山B－0号墳に重複する形でB－1号墳が築造されている状況からみても、中期から後期へ造墓が継続した可能性は低い。一方、6世紀以降は後期群集墳である安満山古墳群や梶原古墳群、磐手杜古墳群などが形成を開始し、7世紀まで古墳の築造が続く。安満山古墳群で40基、梶原古墳群で20基ほどの横穴式石室墳がこれまでに確認されている。現時点ではこれらの群集墳にはそれぞれ個別の名称が付され、異なる古墳群として登録されているものの、安満山山塊全域の古墳分布が不明なこともある。巨視的には大型群集墳の支群に相当する可能性も想定できる。また、安満山山塊の西側斜面にあたる成合地区では、散在して分布する小規模な横穴式石室墳の確認が続いており、成合古墳群、成合西王子山古墳群、成合地獄谷古墳群、成合門前下古墳（合田ほか 2021）などが6世紀後半から7世紀にかけて営まれ、成合谷の開発や集落の進出との関係が検討されている（笹栗 2016）。

第3節 既往の調査成果

梶原古墳群に関する比較的古い記載である『高槻市史考古編』（原口編 1973）では、梶原古墳群で3基の横穴式石室が認められるとされ、うち1基（1号墳）から採取された遺物が写真図版に掲載されている。また、成就寺北側の丘陵斜面にも3基の古墳があるとされ、この付近出土の須恵器写真が記載されている。本文の記述と付図の文化財分布図を参考にすると、梶原古墳群の3基は、後述する名神高速道路内遺跡調査会によりB地区とされた範囲にあたり、名神高速道路拡幅時に調査された古墳のいずれかに該当する可能性もある。また、成就寺北側の3基の古墳は、付図では丸山古墳群として示されるものに相当し、図上で正確に重なるものではないが、名神高速道路拡幅時の調査でG地区とされた範囲に該当すると考えられる。この文化財分布図では梶原古墳群の範囲に6基のドットがあり、本文記載の古墳以外にも、さらに古墳が分布することが知られていたようである。当初異なる名称が付されていた梶原古墳群と丸山古墳群は、現在は広く梶原古墳群として周知されている。

その後、昭和53年（1978）2月には、梶原古墳群の範囲内で竹藪での筍栽培の土取り作業中に円筒埴輪を用いた円筒棺が発見され、緊急調査されている（森田 1981）。高さ0.77m、口径0.34mの4条5段の普通円筒埴輪を小規模な墓壙に収めており、写真では小口部分を礫でふさいでいるようにもみえ

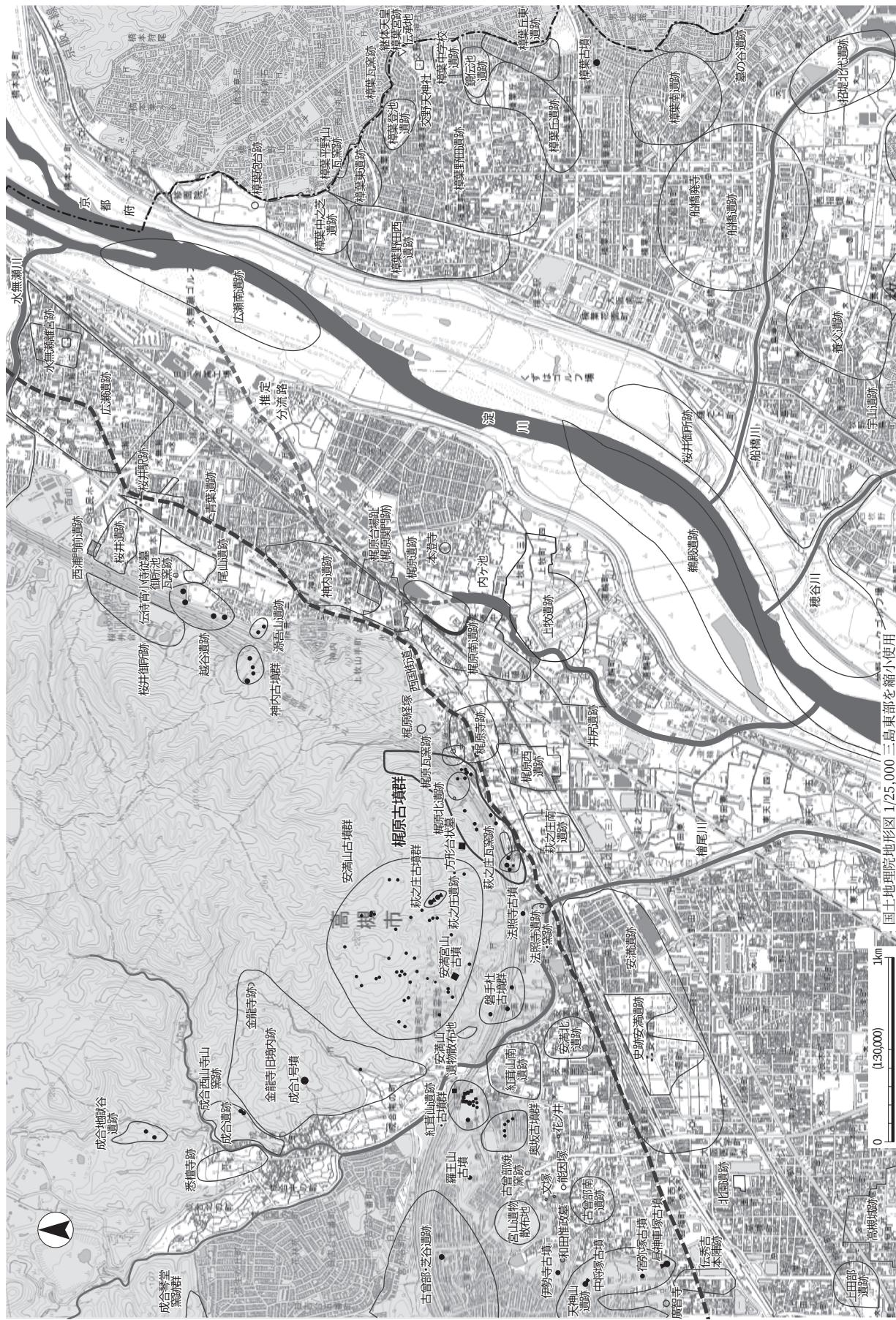


図2 淀川北岸東部地域遺跡分布図

る。規模からみて小児棺と推測されている。報文では4世紀末から5世紀初頭のものとされ、墓壙からは布留式の新しい段階の甕も出土しているとの記載もある。地図に示された調査位置のドットを現在の分布図に重ね合わせると、出土位置は梶原古墳群C地区に含まれる可能性が高い。

梶原古墳群における本格的な埋蔵文化財調査は、繰り返し触れてきたように、名神高速道路の拡幅工事に伴う名神高速道路内遺跡調査会によるもので、平成3年度（1991）から平成5年度（1993）にかけて実施された（川端編1998）。この調査では、既存の名神高速道路の南北に残る尾根部分を中心に12か所の調査区が設けられ、E地区を除く各地区より合計18基の古墳が、比較的まとまりをもって検出された。すでに古墳時代後半期の群集墳として認識されていたものと考えられるが、この調査によってあらためて群集墳としての位置づけが明確になったといえよう。調査地は現況が竹林などとして利用され、地表面の改変も著しかったことから、墳丘や埋葬施設が完存するものはなく、横穴式石室の墓壙のみや、周溝のみが確認されたものも多い。石室が遺存するものでも残存度合いは低く、遺物の出土状況をみても原位置を保つものは限られている。埋葬施設からの出土遺物では銅鏡、装身具、武器類、馬具類はわずかな古墳から出土するのみで、多くは須恵器を主体とする土器に限られ、全く遺物が出土しなかった古墳も多い。各古墳の築造時期、ひいては古墳群の形成期間も断定しがたいが、築造時期を推定できる古墳を基準とすると、おおむね6世紀中葉から7世紀中葉までが古墳群の形成期間であり、併行して追葬が行われていたとみることができる。

既存の名神高速道路により南北に分断されてはいるものの、本来は連続する尾根であったと想定可能な地区設定が行われており、古墳が分布する尾根それぞれを支群としてみると可能ではある。不確定要素も多い中で、調査成果に限って支群ごとの古墳の規模や築造時期を比較するならば、各支群の性格付けを行うことも可能である。三累環式柄頭（大刀）を副葬するB-1号墳や、凝灰岩製組合せ家形石棺を持ち、銅鏡や金銅装馬具を副葬するD-1号墳が優勢な古墳であり、6世紀後半段階に、支群間の格差を有する状況がみて取れる。B・C・D・Fの各支群は6世紀中葉もしくは後半に群形成を開始する後期群集墳としての様相をよくみせるものの、A支群、G支群は7世紀にはいってから形成を開始する終末期群集墳としての支群である可能性をもつ。一方、築造時期は不明とされているが、C支群では近接して分布する方墳2基が確認されている。埋葬施設が遺存しておらず、古墳である確証も得られてはいるものの、墳形の把握できる他の古墳が円墳に限られていることから、この2基は後期群集墳に先行する初期群集墳となる可能性も残されている。ただ、仮にこの2基と円筒棺を初期群集墳とみても、後続する古墳との時間的な断絶は大きく、支群が5世紀から7世紀まで継続して群形成を続けたとすることは難しい。

大きく時期の異なる墳墓が近接地に営まれる状況は、直近の発掘調査でもあきらかとなった。平成27年度（2015）に実施された、主要地方道伏見柳谷高槻線の拡幅に伴う発掘調査ではF支群の分布する尾根の上方、標高82m付近で弥生時代末期の方形台状墓の一部と考えられる溝が確認され、加飾された二重口縁壺が出土している（三宮2015）。古墳時代初頭前後の墳墓の墓域と、6世紀の古墳の墓域が結果的に重複した状況と考えられる。

梶原古墳群は周知の埋蔵文化財包蔵地内においても未確認の古墳が残されている可能性もあり、さまざまな土地改変によりすでに失われた古墳も多いことが予想される。現状の知見に限った理解だけでは不十分であることを十分に意識しつつ、古墳群全体、さらには集落遺跡の動向も加味した地域史としての評価を行う必要があるといえる（笛栗2021）。

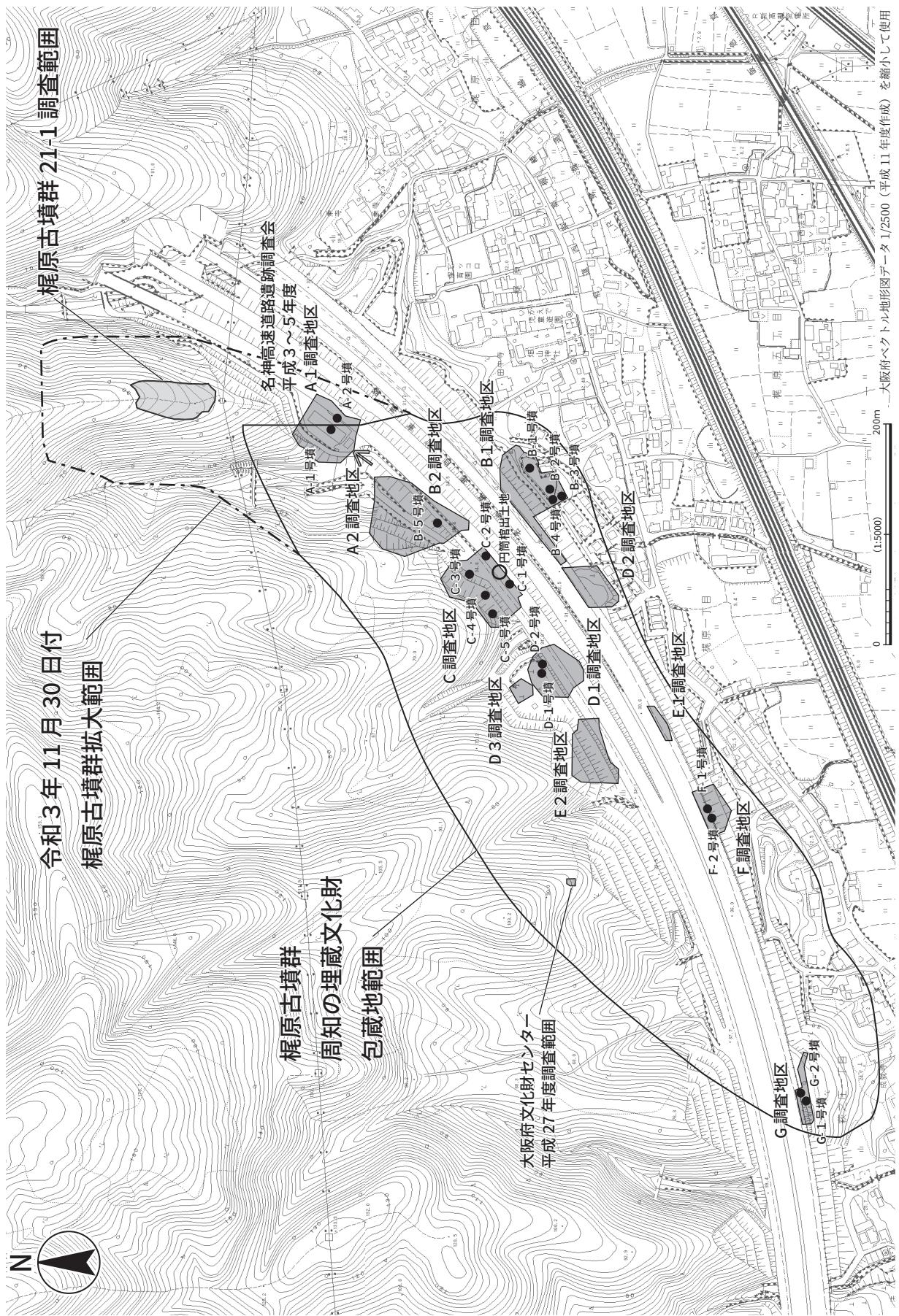


図3 梶原古墳群 既往調査成果合成図

第3章 調査の方法

今回の調査および整理作業・報告書作成は、公益財団法人大阪府文化財センターの『遺跡調査基本マニュアル』および、その後の追加修正指示に則って実施した。

調査単位 事業契約ごとに調査名を付すこととなっており、今回の調査は「梶原古墳群 21-1」となる。また、本書は当センターによる梶原古墳群のものとしては2冊目の調査報告書となることから、書名を『梶原古墳群 2』とした。

地区割 調査範囲内の2次元的な位置把握のため、調査範囲全域を世界測地系(平面直角座標系第VI系)に基づく10m×10mの区画に分割し、原則的にこれを単位として地区設定を行った。区画の設定方法については図4に示した。また今回の調査では古墳の検出が予想されたため、地区割とともに、地形に即したエリア区分を併せて実施し、遺物分布などの把握に使用した。

遺構名・遺構番号 調査時の遺構番号としては遺構種別に関わらず通し番号とし、遺構番号一種類の順で表示した。また、本書での報告に際しても、遺構番号を整理する必要がなかったことから、調査時に付した遺構番号とその表記を、そのまま使用することとした。

掘削 機械掘削としては、現地表面を構成する腐植土層(第1層)を対象とし、小型重機を用いて慎重に掘削を行った。地形や残根の状況により機械掘削が難しい部分と遺物包含層(第2層)、ならびに遺構の埋土については人力で掘削した。最終的な掘削深度については、調査完了前に大阪府教育府文化財保護課の立会い指導を受け、その指示に従った。

測量・図面による記録 調査成果の記録のうち、調査範囲全体については無線操縦ヘリコプターを用いた空中写真測量を実施し、50分の1縮尺の平面図を作成した。また、調査範囲全体の遺構の概略や調査時の記録記載のため、トータルステーションを用いて100分の1の全体平面図を隨時作成した。個別の遺構や遺物出土状況などについては適宜、5分の1～20分の1縮尺で測量を実施した。土層断面図については、20分の1縮尺で適宜作成することとし、調査範囲全体の旧地形や層序関係が把握できるよう努めた。

写真による記録 調査成果の記録のうち、写真記録については、調査担当者によるデジタルカメラ(Nikon D5600)を用いた記録のみとした。また本書には、空中写真測量に際して、無線操縦ヘリコプター搭載のデジタルカメラ(Canon EOS 5D Mark IV・SONY α7 R II)を用いて撮影したデジタル画像も使用している。

出土遺物の管理 出土遺物は調査時の取り上げの単位ごとに登録番号を付し、出土遺物登録台帳を作成した。登録番号は1～98となった。このうち本報告書に掲載の遺物については、報告書を単位とする実測遺物番号、報告書掲載番号を個別に付し、実測・掲載遺物台帳を作成した。実測遺物番号は1～46となった。写真のみ掲載の遺物を併せ、本書掲載の遺物点数は53点となった。報告書刊行後の管理には、報告書掲載遺物、未掲載遺物ともコンテナ等に収納し、掲載遺物、未掲載遺物ごとにコンテナ番号を付したうえで、上記台帳で管理するほか、収納コンテナリストを別に作成した。掲載遺物コンテナが1～6、未掲載遺物コンテナが1となった。

調査方針の検討 今回の調査では、調査着手前には主たる調査対象と予想された古墳の分布が不明瞭であったことから、調査掘削による不慮の遺構削平などを予防し、また、効果的な調査記録を作成する

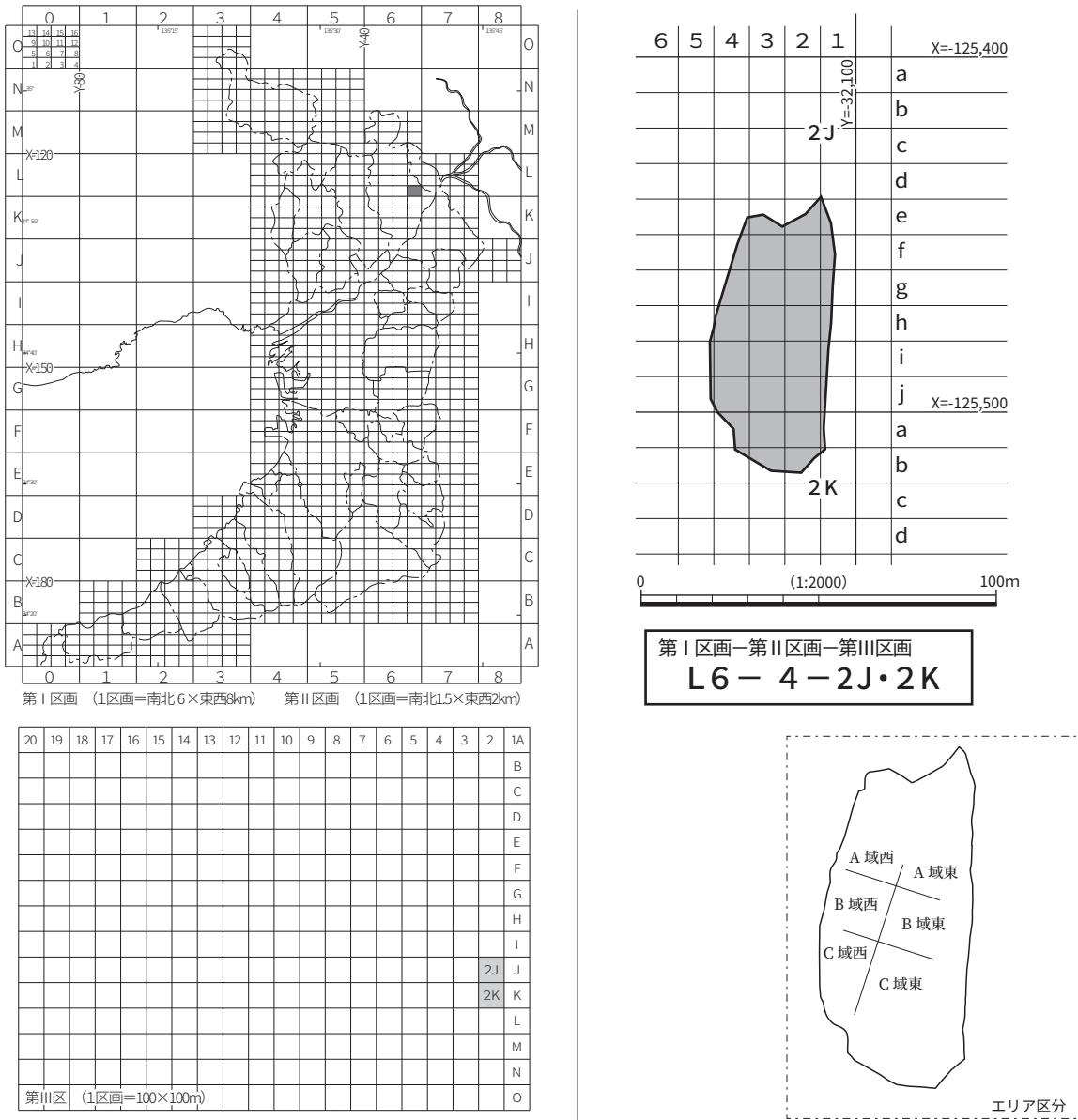


図4 調査区地区割図

ため、掘削着手前にも空中写真測量を実施し、50分の1縮尺の現況測量図を作成することとした。測量図を参考に、担当者による現地の確認を併せて実施し、古墳の分布を検討した。結果、古墳の位置を確定するにはいたらなかったが、尾根稜線付近にはその痕跡が残されている可能性が推測された。これに基づき掘削作業の計画と土層観察用アゼの設定を行った。この際想定した古墳の規模は、可能性が低いことは意識しつつ、墳丘長30m、後円部径18m程度の前方後円墳を最大に、径ないしは一辺十数m程度の円墳・方墳を最小とした。試掘調査で埴輪片が出土した地点もここで想定した古墳の範囲内に収まっている。図5に示した十字の直線が、古墳の存在を念頭に設定した土層観察断面の位置で、尾根稜線方向に1条、尾根横断方向に2条の土層観察用アゼを設けた。また遺物の取り上げに際しては、先述の国土座標による地区割とともに、この土層断面を基準にしたエリア区画も記載することとした。

なお、次章で詳述するように、調査の結果としては、古墳の痕跡はこの尾根稜線部分には認められず、「C域東」とした範囲の東端で、東斜面の造成により大部分を削平された状態で確認されることとなった。試掘調査で出土した埴輪片のほとんどは、原位置から大きく移動した箇所で出土したこととなる。

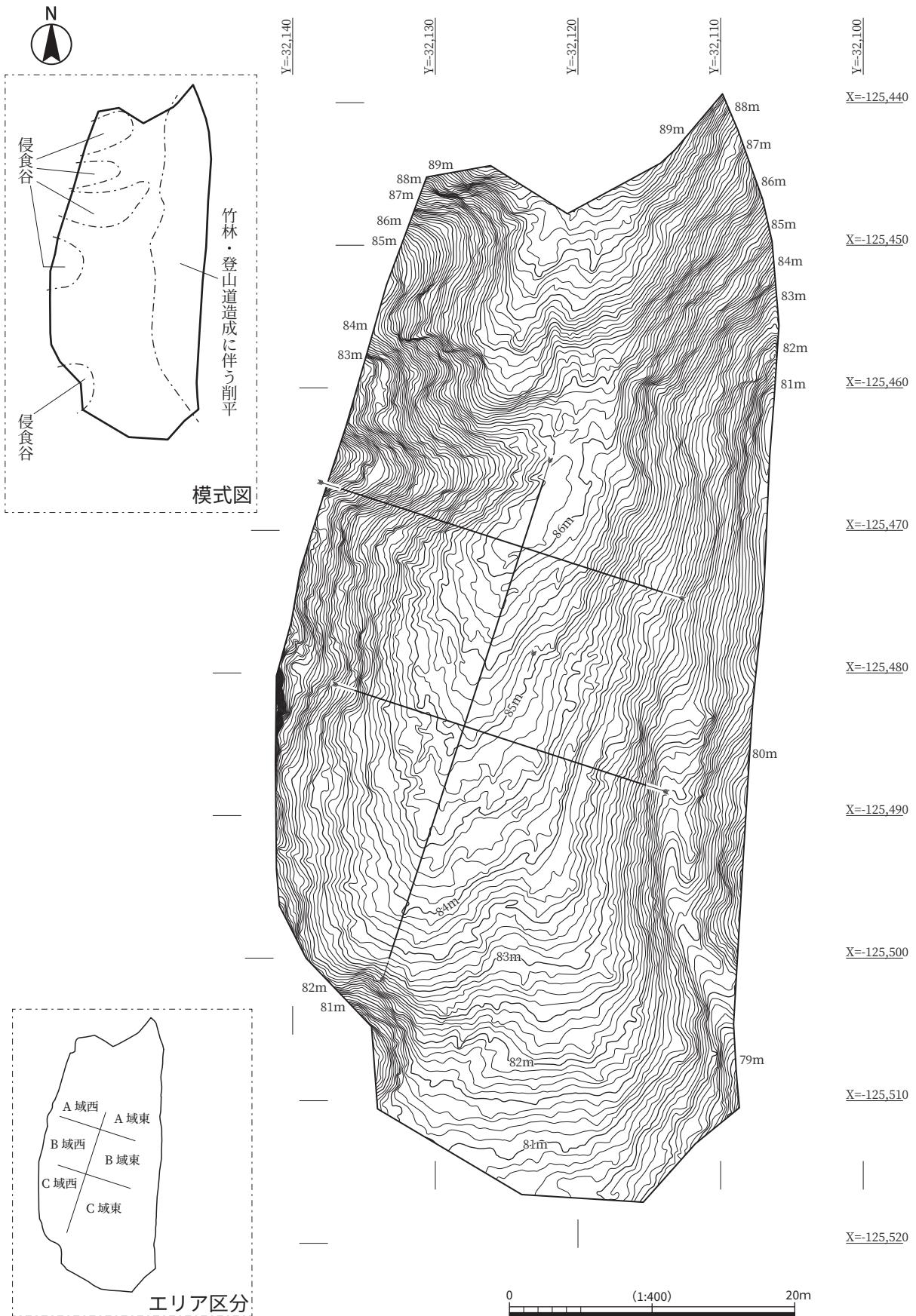


図5 現況平面図

第4章 調査成果

第1節 地形と基本層序

今回の調査対象地点は、北摂山地の南端が平野に接する付近に位置し、山地より平野側に派生する細い尾根の稜線上にあたる。先述のように、調査着手前の地形観察や現況測量図から、およその地形と土地改変の様子は把握できた。ここでは調査における観察結果を加味しながら、あらためて地形と土層序について、記述する（図6）。

今回の調査範囲は北から南に延びる尾根稜線を中心に、その東西斜面が含まれる。調査範囲外の地形については詳細な観察を行ったものではないが、調査範囲の南端から南へ20mほどまでは比較的傾斜の緩やかな尾根稜線の平坦部が続き、それより南は急斜面となり、名神高速道路へ至る。また調査範囲の北側は尾根稜線がやや急な傾斜をもつものの、北端から20mほどでやや平坦な鞍部となり、さらに上方に傾斜をもつ稜線が延びる。調査範囲の東西下方は、東は一乗寺川、西は三五郎川という開析谷へ急傾斜の斜面が続く。このように調査範囲の地形概略としては、およそ北から南へ長く延びる細尾根の、その一部がやや緩やかな勾配をとる平坦部付近ということになろうか。

全体としては標高80～89m程度にあたる調査範囲内の微細な地形としては、中央に幅15mほどの稜線上の緩傾斜部分が南北に延び、調査区北端から20m付近で標高86.1mほどのピークをもつ。その北側でわずかに低くなるものの、さらに北側は急傾斜で標高89m付近までぼる。尾根稜線の平坦部から南は傾斜がいささか増すものの、比較的幅の広い緩斜面が調査範囲南端まで続く。調査範囲の東斜面北寄りには幅12m程度の凹部があり、南寄りに小さな侵食谷と考えられるものが南に並ぶ。また登山道の造成によると考えられる大規模な削平が行われた可能性が高い。調査範囲の西斜面は、北寄りに大規模な侵食谷が3条並び、南寄りにも小規模な侵食谷が複数認められる。大型の侵食谷は一部、基盤層まで掘り下げ、最深部は基盤層である岩盤上に細いV字の侵食痕が刻まれていることを確認した。

基本層序としては、現地表面を構成する腐植土層（第1層）、部分的に遺物を含むシルト質土壤（第2層）、基盤層と認識したが、上記のような地形環境と基盤層の岩質ゆえ、全域に認められるものではない。尾根稜線の比較的平坦な部分は、第1層の直下に基盤層である岩盤が露出しているところが多く、基本的に堆積よりも侵食、削平を受ける環境であったと考えられる。一方、尾根の頂部東西斜面ならびに南に延びる緩斜面には、試掘調査でも確認されたように、第1層の下に第2層が部分的に分布する。第2層の残存範囲は限定的かつ、浅いところも多いが、尾根頂部の平坦面から南では、尾根の稜線に沿う方向に、溝状に分布している箇所が複数みられ、堆積層でありつつも、基盤層の侵食と同時に形成された土壤の可能性が高い。植物擾乱の影響も著しいようで、樹木の根が濃密に分布している。なお、調査区北西側の傾斜面には第2層とした土壤が厚く分布するが、これは竹林造成時に侵食谷に持ち込まれた客土の可能性もあって、他の箇所の第2層と比べると、いささかしまりの悪い土壤であった。

第2層は試掘調査の段階から埴輪を主とする古墳時代の遺物を含むことがわかっていたので、原則として調査では除去し、基盤層上面で遺構の検出を行う方針で掘削を進めたが、後述するように、おそらく古代にさかのぼる遺構である焼土坑がこの第2層の上面から切り込んでいることが判明し、第2層を完全に除去した面を遺構面とすることには問題が生じることとなった。このため、A域・B域について

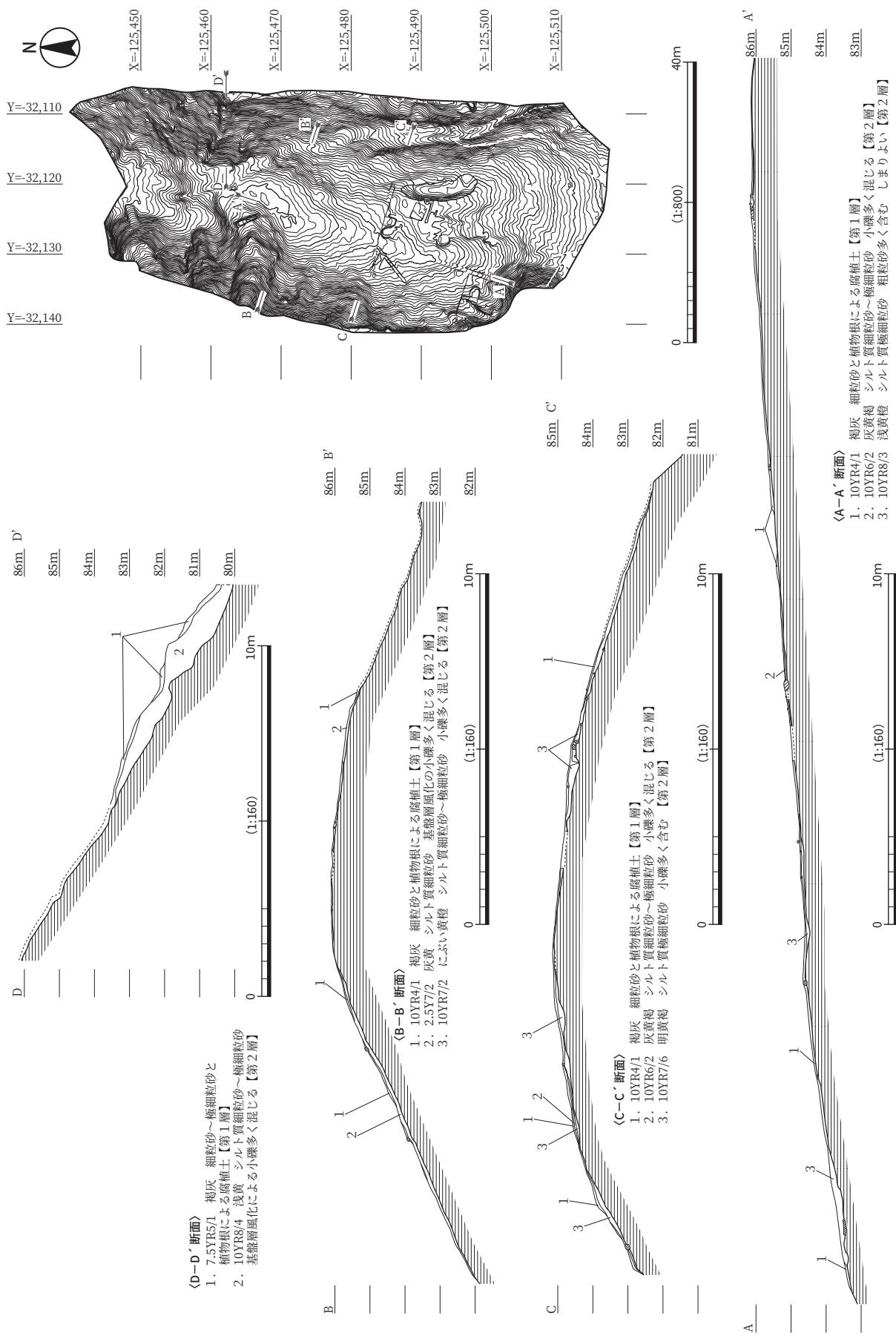


図6 地形と基本層序

は第2層を除去した状態で、C域東エリアは遺構の周囲のみ第2層を残した状態で、C域西エリアは第2層の分布範囲を検出した状態で、空中写真測量を実施することとした。なお、遺構面の呼称としてはいずれも第1面とした。

第2節 遺構と遺物

第1項 遺構分布と層出土遺物（図7）

前節までに示したように、今回の調査は試掘調査において遺構・遺物が確認された部分を含む、丘陵尾根稜線部分を中心とした南北約75m、東西約33mを範囲として実施した。最終的な調査面積は2,080m²である。今回の調査で検出した遺構・遺物について詳述する前に、調査範囲全体の遺構・遺物の分布状況とともに、それらが希薄であった範囲について記載しておきたい。

ここで調査区の北半分とする、X= - 125,460 ラインより北側には遺構は全くみられない。前節で示したように調査区北半分の尾根稜線付近は、第1層とした腐植土層の直下に基盤層である風化岩盤層が露出する部分がほとんどであり、現在もなお、侵食が進んでいる地形と考えられる。調査区南半分で遺物を含む層である第2層が、基盤層の風化土壤であればこの範囲でも形成された可能性はあるものの、現状では確認できない。もとよりこの範囲には遺構・遺物が分布していなかった可能性も高いが、仮に遺構が営まれたことがあったとしても、削平・流失したものと考えられる。調査区北半の東斜面には緩やかな侵食谷と考えられる凹地と、それを埋める第2層が認められるが、竹林としての土地改変が著しいようで、遺構はみられず、遺物も全く出土していない。調査区北半の西斜面には大規模な侵食谷が3条並び、第2層により埋積している。埋土の深い部分では深さ1.5m程度を測り、第2層の埋積は及ばない侵食谷の端部からみると2mほどの深さを測るところもある。これら侵食谷のうち、南端の最も規模の大きなものからは、第2層からわずかに遺物が出土している。近世以降のものと考えられる瓦片とともに、古墳時代の須恵器壺蓋片（図版14-47）、奈良時代にさかのぼると考えられる須恵器壺の底部片（図13-22）が出土している。調査範囲の土地利用時期の一端を示す遺物である。なお、試掘調査の段階で溝状の遺構の可能性が指摘された落ち込みは、この侵食谷の頂部にあたることが判明した。

X= - 125,500 ライン付近から南側を南端部とすると、この範囲も遺構は全くみられず、遺物の分布も極めて希薄である。この付近は比較的緩やかな勾配をもつ平坦地形ではあるが、現代のものと判断した一字一石経埋納施設と関西電力高压線鉄塔の避雷針放電索埋設溝といった攪乱のみが確認された。第2層が分布する範囲であり、大きな流失はないと考えられ、もとより遺構は営まれなかつた範囲と考えられる。南端部の東斜面は登山道の造成により大きく地形の改変を受けたと考えられる。また西斜面は侵食谷がみられるとともに、尾根稜線部分より延びる第2層の溝状の分布が認められた。遺構と認識するものはないが、図7に★印で示した地点の第2層から古代の瓦片3点（図15-44～46）が出土している。先述の北半侵食谷出土の須恵器片とともに、土地利用時期の一端を示している。また、直接の調査対象ではないが、侵食谷の埋土から明治22年（1889）発行の5銭硬貨が1点出土している。

X= - 125,470 ライン付近から X= - 125,500 ラインの間は相対的に遺構・遺物の分布が多い範囲といえる。遺構には5基の焼土坑（1～5焼土坑）と溝1条（6溝）があり、いずれもこの範囲のさらに南半分に分布し、遺物も6溝の埋土とその近接地に集中して分布する。遺構として痕跡を残す土地利用の核がこの部分にあることはあきらかであるが、一方で、遺構はみられないものの、北寄りの範囲にお

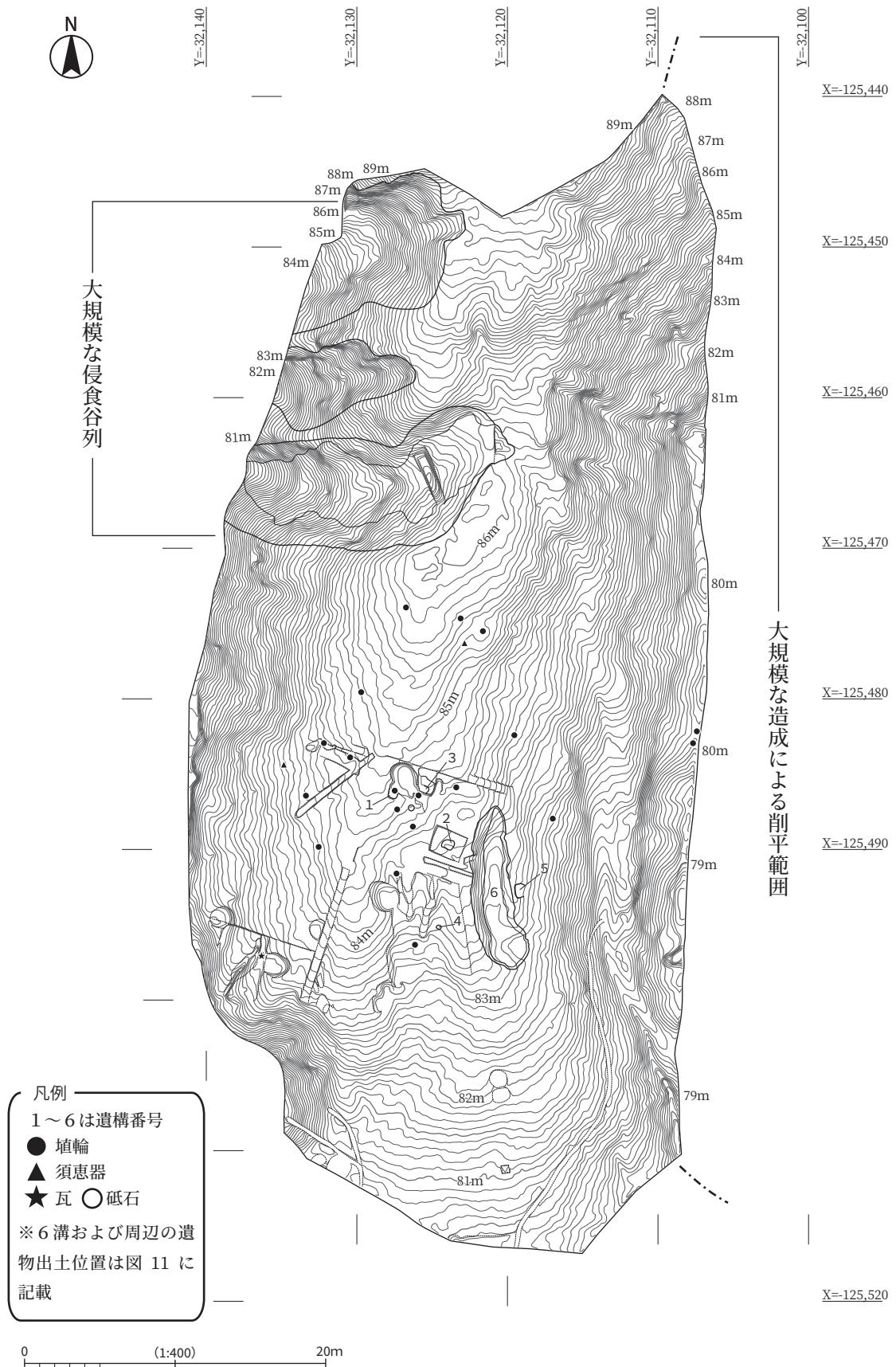


図7 全体平面図

いても散漫ながら遺物の分布が認められる。遺構とその周辺の遺物の出土状況については次項で記載することとし、ここでは遺構に伴わない遺物の分布状況について記載したい。図7に●印で示した地点からは試掘調査で確認したものを含め、埴輪が出土している。微細な破片がほとんどであるが、図14・15に示したものの中、24・28・39・41～43はこの範囲の第2層から出土したものである。また、図7に▲印で示した地点からは須恵器の細片が出土しており、出土地点をおさえていないものでも、B域東、B域西エリアの南寄りや、C域西エリアから須恵器の出土がみられる。図13に示した21や、写真図版14に写真のみ掲載した48～53はこの範囲の第2層から出土したものである。さらに図7に○印で示した位置の第2層からは、砥石片が出土している（図13-2）。埴輪、須恵器、石製品とも細片のみの出土であり、原位置からは大きく移動している可能性が高い。しかし散漫な分布ながら分布傾向をみると、埴輪片はこの範囲のなかでも北寄りのやや広い範囲にまで広がっている一方、須恵器片は南寄りに分布する様相が認められる。このような分布傾向のわずかな違いは、後述する遺構出土遺物の分布とも対応するようである。

第2項 遺構

上述のように、今回の調査で確認した遺構は調査範囲の中央尾根稜線上から南東側、エリアで示すとC域東とした範囲にまとまって分布する（図8）。調査地の東斜面は大きく削平を受けていると考えられ、

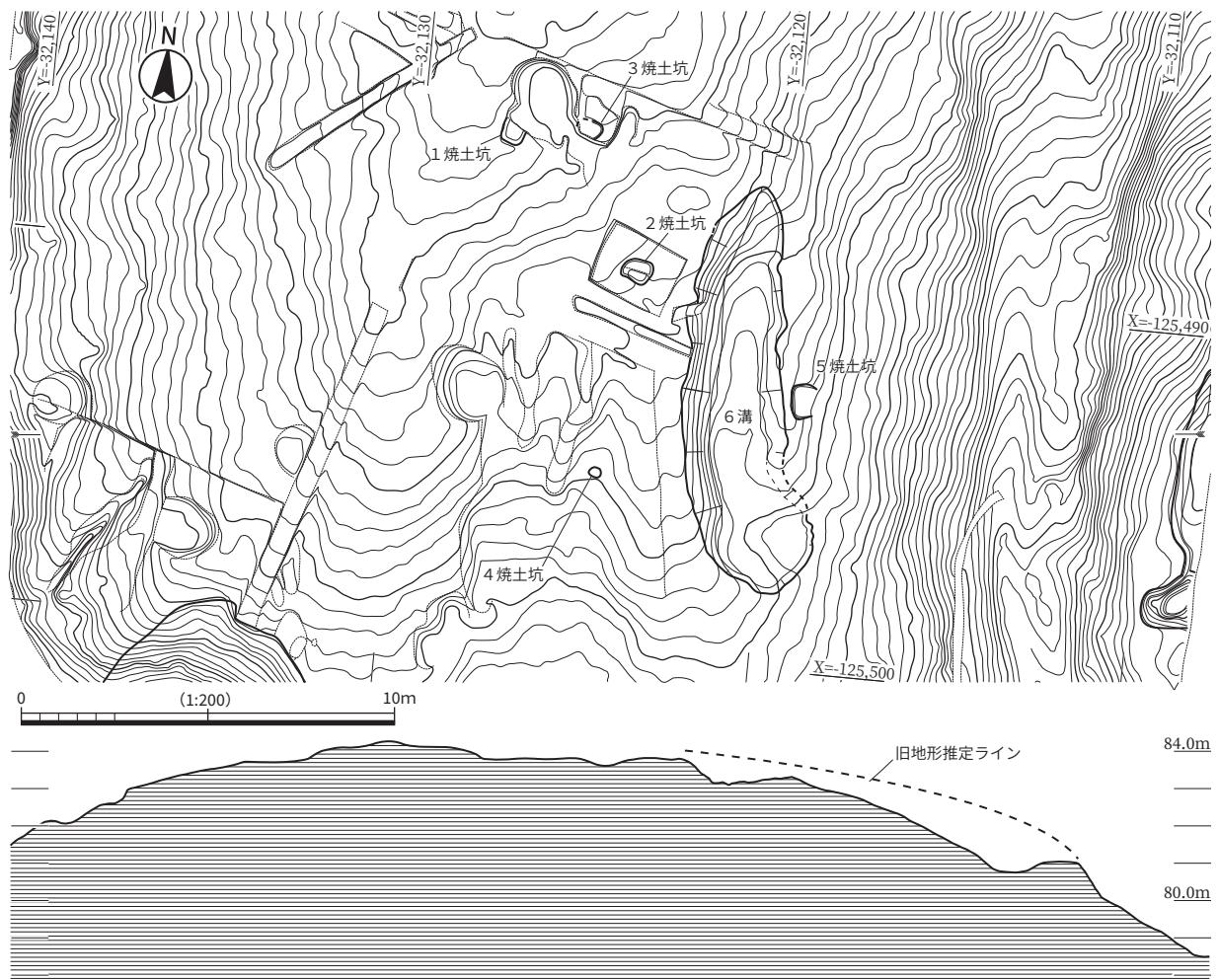


図8 遺構分布範囲 平・断面図

6溝はその削平から辛うじて逃れたC域東の東縁辺にあり、1～5焼土坑の分布は6溝に重なりつつ、その西側の平坦面に分布する。1～3焼土坑は比較的近接した位置にあり、想定される遺構の主軸も規則的な方向性をもつようであることから、規則的な配置と評価することができる。各遺構の層位的な関係については、1～3焼土坑については第2層の上面で検出している。4・5焼土坑、6溝は、第2層の掘削を進める中で、遺構の存在を認識するにいたったもので、第2層との前後関係について明確にできなかった部分が多い。

1～5焼土坑（図9、図版5） 1焼土坑は焼土坑群の西端にあり、試掘調査坑により北側が失われている。上部も削平を受け、底付近のみが残存すると考えられる。残存部分では長さ0.5m以上、幅0.63m、残存深0.09mを測り、方形の平面形をもつ。壁面に緩やかな焼土化部分があり、埋土は焼土粒・炭化物粒を多く含むシルト質土壌である。内部から遺物は出土していない。2焼土坑は1焼土坑の南東にあり、上部は削平を受け、底付近のみの残存と考えられるものの、全体の平面形は把握できる。長さ0.82m、幅0.61m、残存深0.07mを測る歪な方形を呈する。壁面に緩やかな焼土化部分があり、埋土は焼土粒・炭化物粒を多く含むシルト質土壌である。内部から遺物は出土していない。3焼土坑は1焼土坑の北西にあり、第2層の掘削で南側を失った。上部も削平を受け、底付近のみが残存すると考えられる。残存部分では長さ0.74m、幅0.4m以上、残存深0.09mを測る。壁面に緩やかな焼土化部分があり、埋土は焼土粒・炭化物粒を多く含むシルト質土壌である。内部から遺物は出土していない。4焼土坑は焼土坑群の南端にあり、底付近のごく一部のみ検出することができた。残存部分では長さ0.31m、幅0.26m、残存深0.03mを測る。埋土は焼土粒・炭化物粒を多く含むシルト質土壌で、内部から遺物は出土していない。5焼土坑は焼土坑群の東端にあり、6溝の東側に位置する。南北軸の長方形と

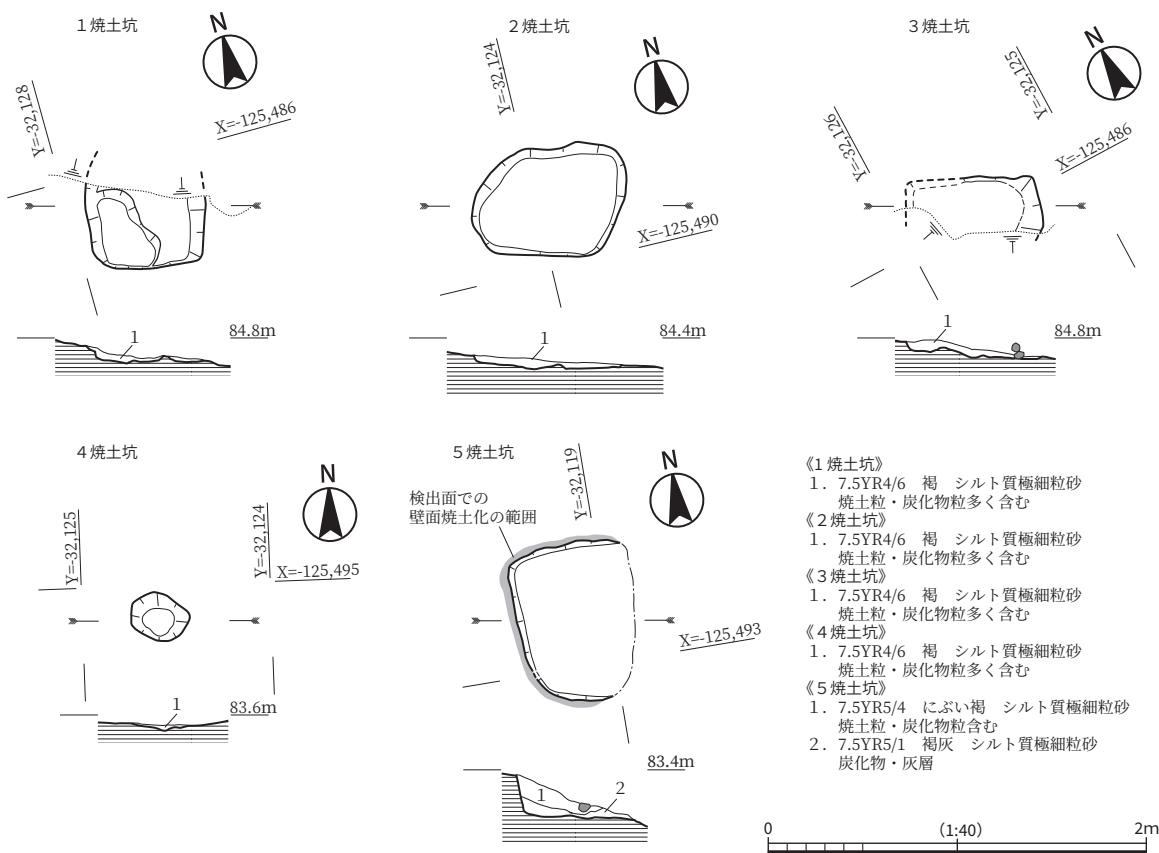


図9 1～5焼土坑 平・断面図

考えられるが、東側は大きく削られている。残存部分では長さ 0.88 m、幅 0.65 m以上、残存深 0.25 mを測る。壁面に明瞭な焼土化部分があり、埋土は焼土粒・炭化物粒・灰を多く含むシルト質土壤で、下位に炭化物・灰の堆積が認められる。内部から遺物は出土していない。5 焼土坑が、後述する古墳の推定墳丘内に重なる点は注意される。

1～5 焼土坑は底部付近しか残存していなかったものの、いずれも本来は平面形が長方形を呈する土坑であったと考えられ、比較的遺存状態の良い 2 焼土坑、5 焼土坑からみて、長さ 0.8 m程度、幅 0.6 m程度の規模であったと推測される。深さは、比較的壁面の残りの良い 5 焼土坑で 0.25 m程度を測る。しかし、これも上部が削平を受けた数値であって、他の調査例を参考にすると、本来は 0.4～0.5 m程度であったと推測する。埋土の下層を中心に炭や灰、焼土を多く含み、壁面が被熱し赤褐色に変色、硬化した部分もみられることから、内部で相応の燃焼が行われたと考えられる。類似する焼土坑は安満山山塊ではこれまでの調査において各所で数多く検出されており、内部から焼骨片の出土するものも含まれることから、古代（奈良～平安時代）の火葬に伴う遺骸の火化施設とする意見が多い。今回検出した焼土坑は、骨片を含め、遺物の出土が全くみられず、帰属時期は不明であるが、層出土遺物の中では古墳時代以降の遺物としては奈良時代の須恵器片と瓦片しか確認されていないことから、消去法的に古代に帰属する遺構と推測しておきたい。

6 溝（図 10・11、図版 6～9） 調査エリアでは C 域東とした区画の東端、焼土坑群の分布範囲の東寄りで検出した南北方向に延びる溝で、長さ約 10.8 m、幅約 2.7 m の規模をもつ。東側を中心大きく削平を受けていると考えられ、深さを単純に示すことはできないが、比較的残りがよいと考えられる図 10 の A-A' 断面付近では、西側の溝肩と底との比高は 0.8 m を測る。また、南北端は浅くなってしまっており、底部の形状は全体的に船底状を呈している。

全体的に炭化物粒や基盤層起源の小礫を含む、黄褐色のシルト質土壤が充填しており、比較的緩やかな水成堆積により埋積が進んだものと考えられる。埋土は境界が不明瞭ながら、主に色調で上下に細分が可能であり、北寄りの上層には埴輪片を多く含み、南寄りの下層には須恵器片を多く含むといった、包含遺物の様相に違いがみられた。

溝の内部と周辺から比較的まとまった遺物の出土をみた。以下、分布状況を記載したい（図 11）。

まず溝の北寄りからは埴輪片が出土している。A-A' 断面の南北それぞれに、円筒埴輪の底部の比較的大きな破片（30・31）があり、その周間に口縁部を含む破片（29）が分布する。（写真図版 7・8）。層位的には埋土の上層を中心に出土しており、底付近にはみられない。A-A' 断面と C-C' 断面の間からは主に須恵器が分布する。細片が主体ではあるが、北寄りで壇（3）が口縁の一部を欠く状態で、有蓋高壺蓋（5）が完形で出土している。また、須恵器甕（20）が原位置を保って出土している。体部の下半がほぼ据えられた状態のまま残っており、基部上半から口縁部までがその内部に落ち込んだ状態で検出された（写真図版 9）。ほぼ土圧によって破碎し、垂直方向に落ち込んだものと考えられる。なお、口縁の破片より下位に須恵器有蓋高壺蓋（4）が完形で出土したが、当初より甕の内部に収められていたものではなく、甕の破碎時に混入したものと考えている。甕の底部に合わせるように 6 溝の底部が円形に掘りくぼめられており、当初より甕が正位置で据えられていたものと考えられる。ただし溝底の穴は厳密には甕底部の形状とは合致しておらず、その隙間に溝埋土が流入していたが、その最深部より甕の底部片が出土した。当初の据え置き時に甕底が打ち割られたか、甕底と溝底の間の空間に破碎時に底片が落下したかは判断できなかった。滑石製紡輪（1）もこの付近より出土した。C-C' 断

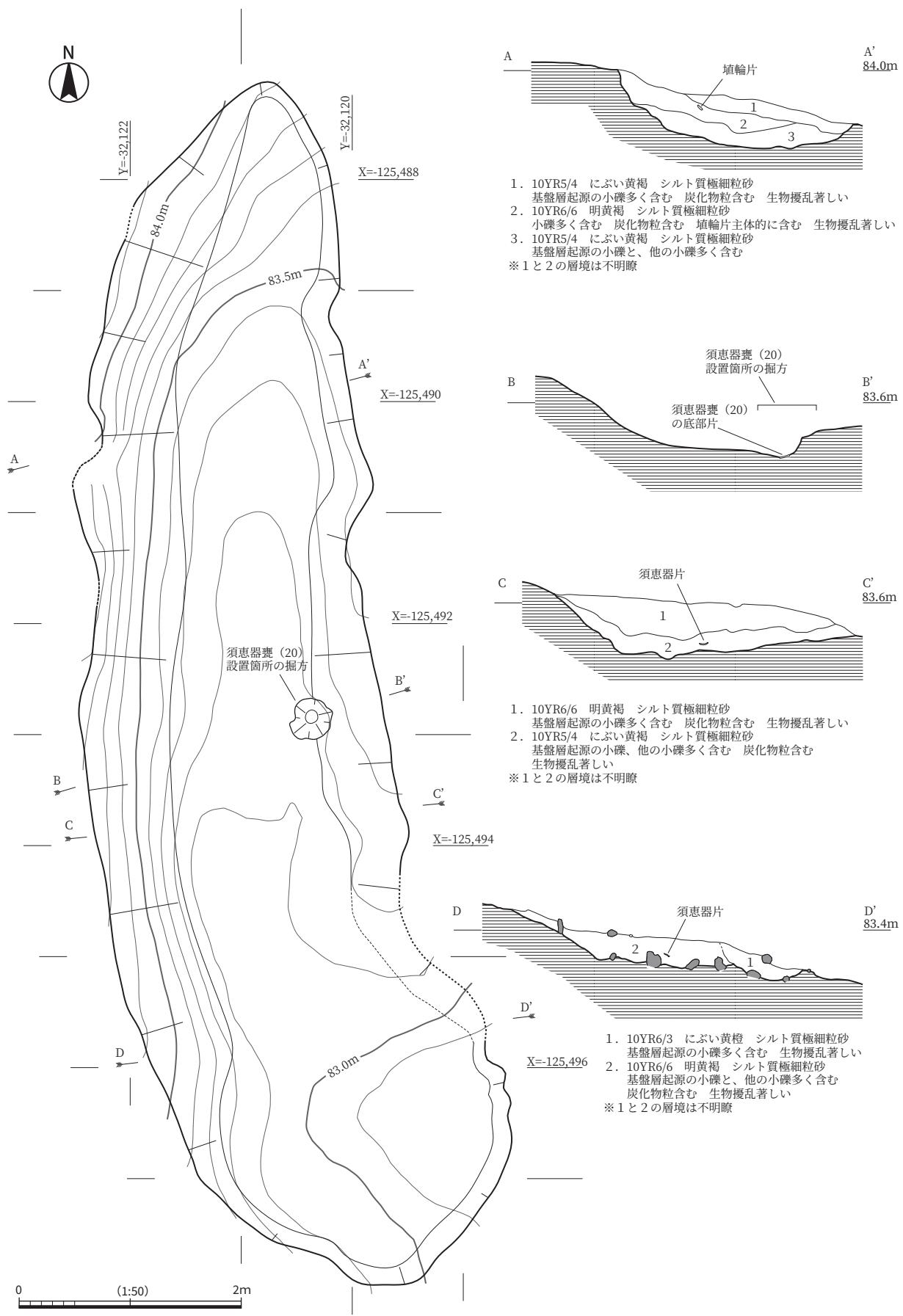


図 10 6溝 平・断面図

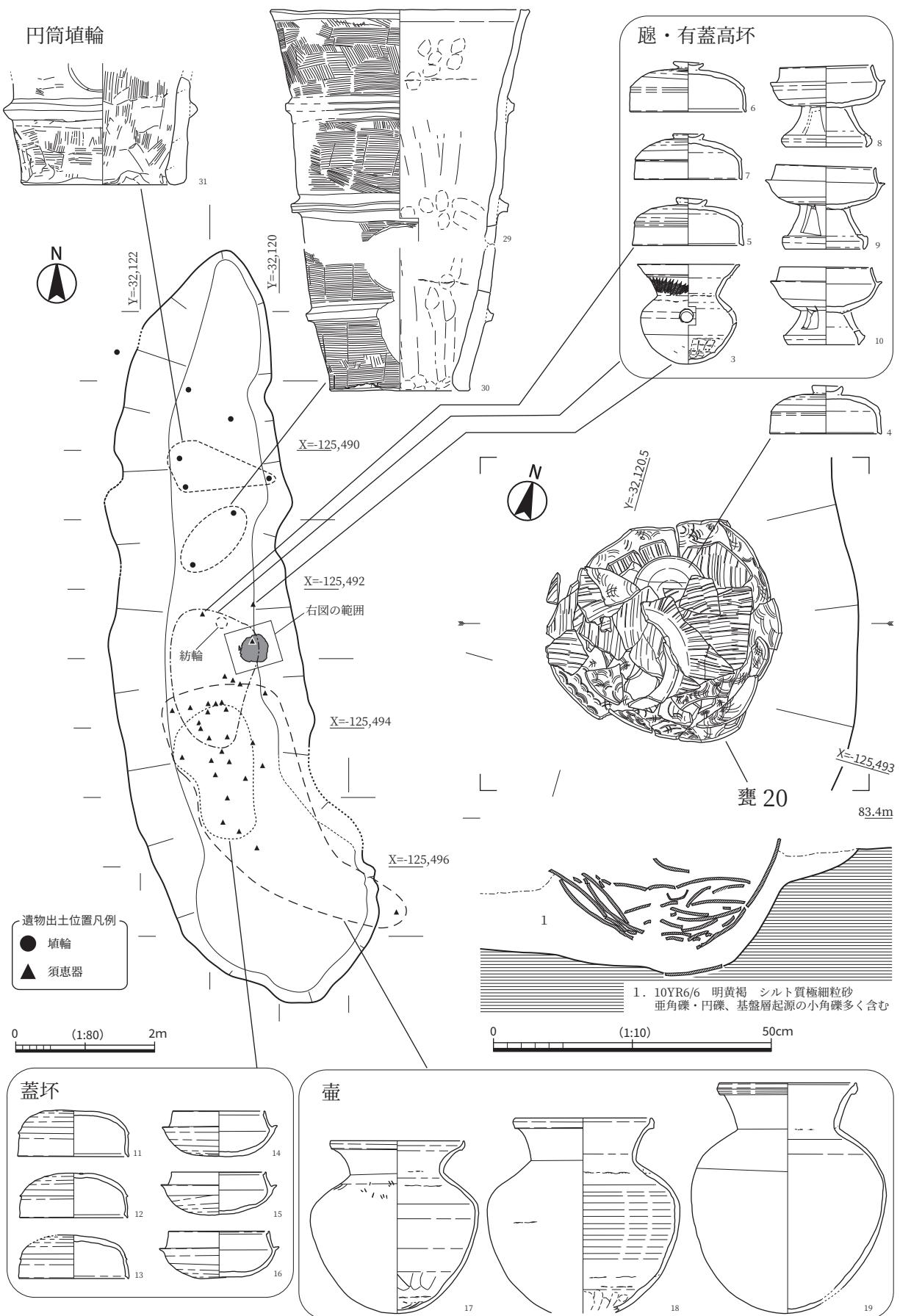


図 11 6 溝 遺物出土状況

面と D-D' 断面の間からは須恵器細片が広範囲に分布する（写真図版 8 下）。溝の底付近で確認したものが多く、異なる個体の細片が混在した状態であったが、傾向としてみると須恵器壺身、壺蓋（11～16）がまとまった範囲に、須恵器壺（17～19）がそれと重なりつつ、より広い範囲に分布している。

6 溝は埴輪、須恵器の出土から古墳に関わる溝と推定され、溝の形状と位置、ならびに旧地形の削平状況から想定すると、一辺 10 m 程度の方墳の西辺にあたる周溝の可能性がある（図 12 右）。この推定を前提に、埴輪片と須恵器片の分布域と出土層位が分かれていたことから考えると、本来、古墳に配置されていた場所が区分されており、溝内外への流入経緯もいさか異なるものであったことが推測される（図 12 左）。滑石製紡輪（1）、ならびに先述した第 2 層出土の砥石（2）は埋葬施設に収められた副葬品の可能性があり、墳丘ともども埋葬施設も削平された可能性が高い。第 2 層出土の遺物分布範囲も併せて考えると、埴輪群は墳丘上に、須恵器群は墳丘裾ないしは周溝内に配置されており、1) 墳丘上の埴輪群の崩壊と周溝内での須恵器群の崩壊・埋没、2) 埋葬施設、埴輪基底部を含む墳丘の削平ないしは流失と周溝の埋没、3) 墳丘の大部分を含む東斜面の大規模な造成・削平、といった段階が想定され、墳丘内に位置する関係の 5 焼土坑は、2) と 3) の間に設けられたと考えられる。埴輪片の遺存部分が極めて断片的であり、かつ細片が比較的広範囲に分布すること、溝埋土上層に、円筒埴輪の底部片が目立つこと、須恵器細片が溝埋土下層に比較的集中して分布することなどは、以上の削平過程で説明可能と考える。一方、須恵器片については当初より破碎された状態で溝内に投棄された可能性も残さ

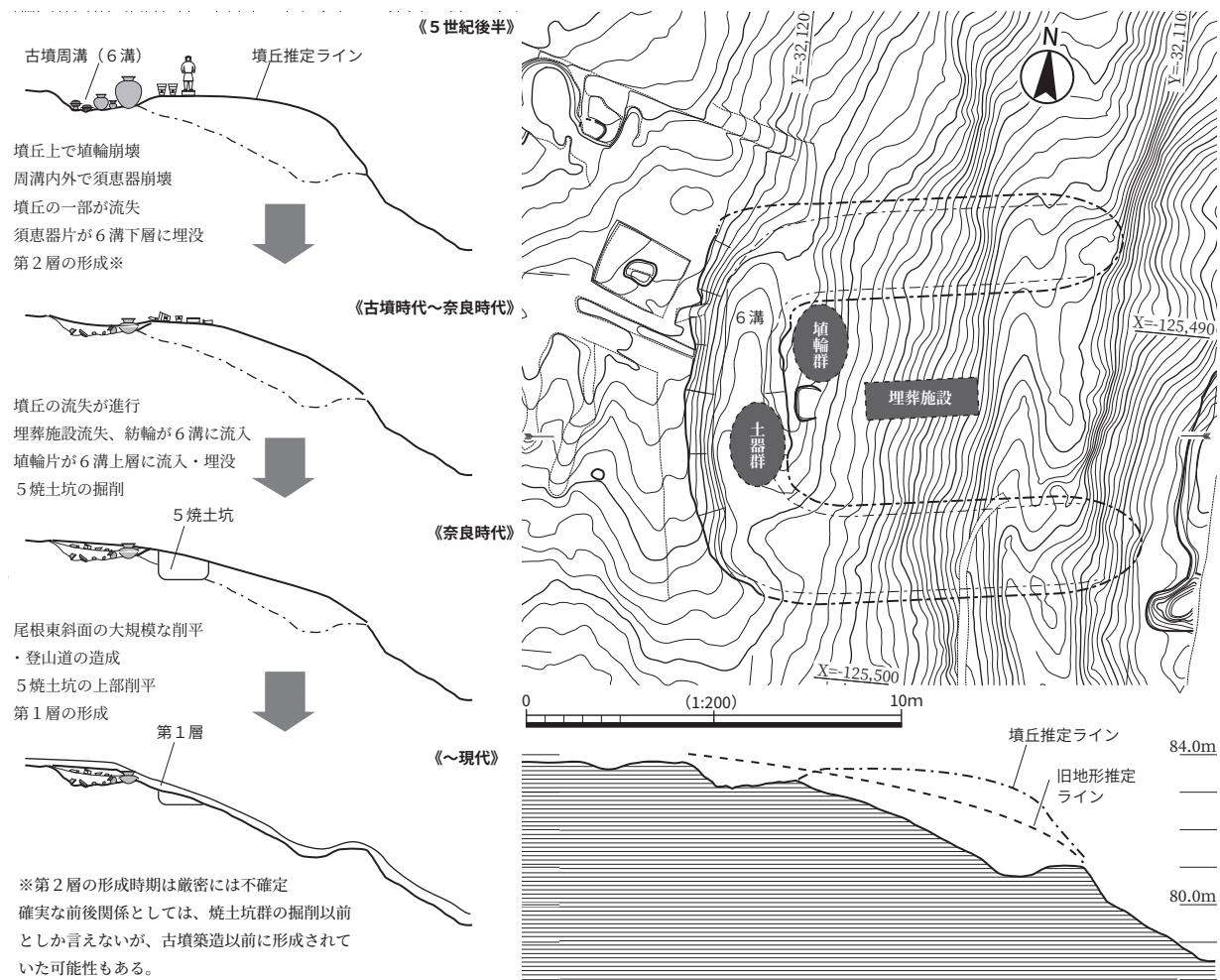


図 12 古墳の復原と削平過程の推定

れる。口縁の一部を欠く個体も多く、その可能性は否定できないものの、甕が正位置で埋置されたと考えられるほか、完形で出土する個体も確実に含まれている。

出土須恵器はTK47型式段階（田辺 1981）、円筒埴輪はIV期末（埴輪検討会編 2003・2022）と考えられ、6溝の年代は5世紀後半と考える。

第3項 遺物（図13～15）

今回の調査で出土した遺物は6溝出土遺物を中心に、古墳時代中期後半に属する石製品、須恵器、埴輪が大部分を占め、奈良時代に属する須恵器と瓦の細片がわずかに含まれる（図13～15）。

石製品には紡輪（紡錘車）と砥石がある。紡輪（図13－1）は滑石（滑石質蛇紋岩）製のもので、断面形が台形を呈する。無文ではあるが、線刻を試みた可能性のある痕跡がわずかに認められるとともに、製作時の加工痕がみられる。6溝内から須恵器片とともに出土しており、古墳副葬品の可能性がある。砥石（図13－2）は小型の置き砥石で、図に示した状態での下半を大きく失い、上端も欠損する。遺存する四面とも研磨痕跡が認められるほか、角の一部にも面取り状の使用痕跡が認められる。石材は流紋岩で、わずかに流理組織が観察できる。6溝からはやや離れた地点（図7の○印）での第2層出土であるが、古墳副葬品の可能性がある。

図13－3～21は古墳時代の須恵器で、21を除き、ほぼ6溝からの出土である。3は壇で、二重口縁の下段に波状文が1段施され、底部内面には突き出しの痕跡が明瞭に残る。全体的に遺存状況が良好でありながら、口縁の一部を欠いており、意図的に打ち欠かれた可能性がある。4～7は有蓋高壺の蓋、8～10は有蓋高壺である。蓋は天井部と口縁部の境が明瞭で、扁平な環状のつまみをもつ。高壺は口縁部がやや内傾しながら伸び、端部に段をもつものと面をもつものの二者がある。脚部にはいずれも方形透かしを三方向に施すが、10は透かしの高さがやや異なる。セット関係を保って出土したものはないが、4と5の蓋は口縁端部の特徴や焼成、また法量がほぼ同じであり、8の高壺を併せて類似点が多く、一連の製品であろう。また、6と9、7と10もセットの可能性がある。胎土に径0.3cm程度の礫を含むものがあり、特徴的である。11～16は蓋壺で、全体的な形態の特徴は有蓋高壺と類似し、口縁端部の形状も有蓋高壺と同様に分類できる。11の壺蓋と14の壺身がセット関係であった可能性がある。口径はほぼ10cm程度の近似値をとるが、16はやや大ぶりである。13の蓋は焼成が甘く、細部の造形も甘い印象がある。また、15の身は焼成時の変形があり粘土の接合痕も残る。胎土に黒色粒を含むものが多い点は高壺と異なるところである。胎土の違いや形態差からみても、生産地の同定には及ばないものの、複数の生産地から供給されたことを示唆する。17～19は壺で、器高はそれぞれ異なるが、製作技法は共通し、体部と底部で成形痕跡（外面のタタキ痕、内面の当て具痕）が異なる。体部外面のタタキ痕は17・19が類似するが、内面は19に同心円圧痕がよく認められるのに対し、17・18は強いヨコナデで当て具痕を消す。それぞれ胎土や内外面の調整、焼成もやや異なり、複数の産地の可能性もあるが、口径はいずれも14.5cm程度で近似値をとり、一定の規範に従っていた可能性がある。20は甕で、全体的に破片と化していたが、復元の結果、口径22.4cm、器高48.0cm、胴部最大径44cmを測る中型の個体である。おおむね原位置を保った状態で遺存していた。口縁の一部を除きほぼ接合が可能であったので、壇と同じように口縁の一部が打ち欠かれた可能性がある。肩から体部の外面は平行タタキを密に施し、内面は同心円圧痕をよく残す。底部外面はタタキの方向が異なり、内面は突き出しによる強い押圧痕が認められる。肩部には自然釉が被る。21は6溝からはやや離れた地点で出土した須恵器甕の

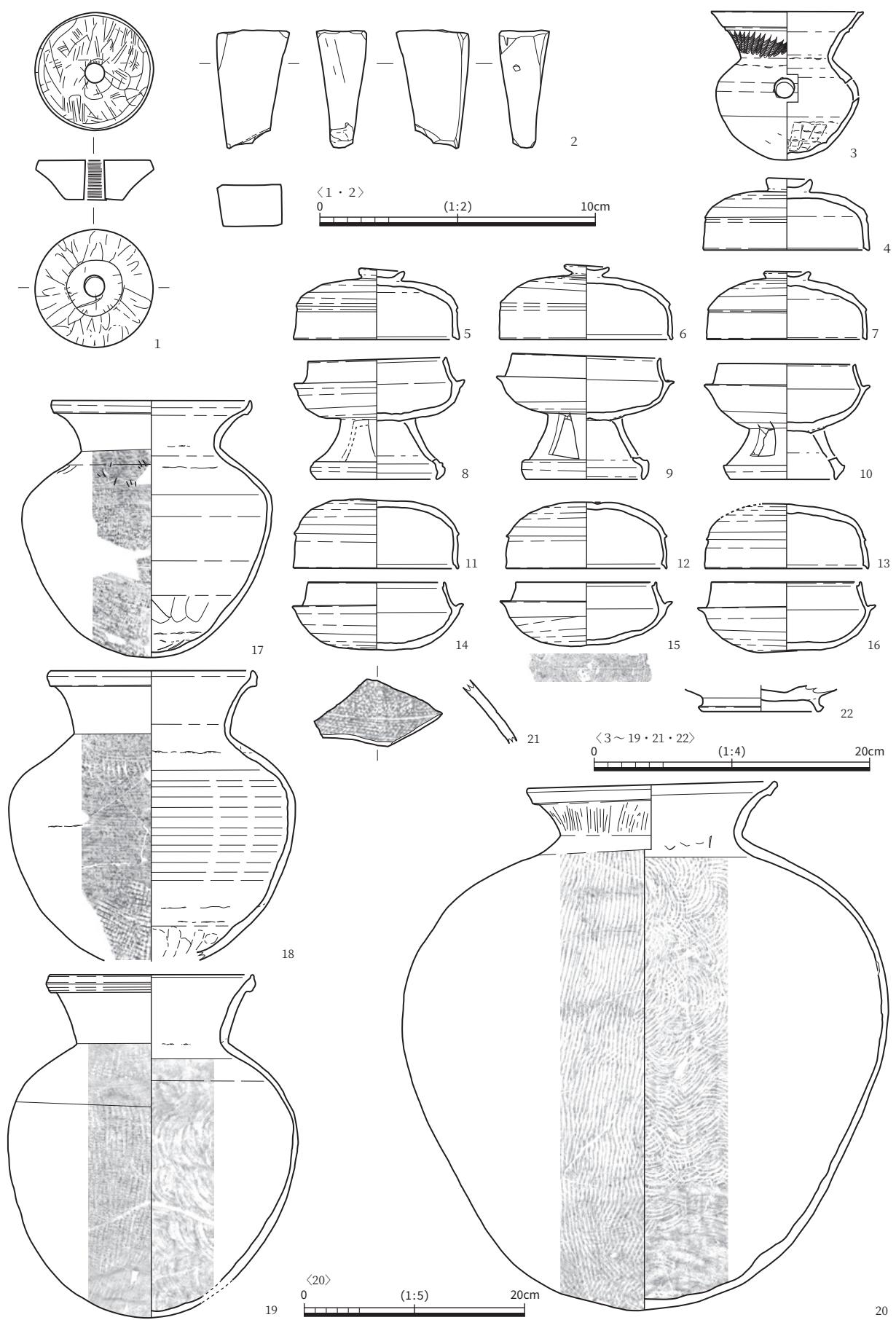


図13 出土遺物（1）



図14 出土遺物（2）



図15 出土遺物（3）

体部片で、細片ではあるものの、外面に格子タタキと螺旋状沈線が確認できる。内面には当て具の痕跡はみられない。朝鮮半島の陶質土器の系譜をひくものと考えられる。図13-22は須恵器壺の底部片で、調査区北西の侵食谷を埋める第2層から出土した。詳細な時期を示すような特徴は明瞭ではないが、後述する奈良時代の瓦片と同時期のものと考えられる。

図14-23～31は円筒埴輪である。23～28は突帯部分の遺存する破片で、細片であり径はもとより天地も判然としない。粘土帯の接合痕跡が確認できたものは内傾接合を基準に個体の天地を判断し、図示したが、写真図版では逆になっているものもある。突帯の形状は断面形が台形を呈するものが主体で、円筒部との接合後のナデ調整が雑なものが多い。体部の調整は1次調整のタテハケと2次調整のヨコハケ（B種ヨコハケ）が認められるものが多い。29～31は6溝の北寄り上層から出土した比較的遺存状態の良い破片で、29と30は接合部はないものの、同一個体と考えられる。図上での復原となるが、口径28cm程度、底径16cm程度、器高41cm程度を測り、3条4段の構成をとる。31を併せ、底部高8cm程度、突帯間隔10～11cm程度であり、底から2段目、すなわち口縁部から3段目に円形透かしを2方向に配置する。外面の調整は、1次調整のタテハケと2次調整のヨコハケ（B種ヨコハケ）が認められ、観察できる範囲ではBd種ヨコハケに限られる。最上段は2次調整のヨコハケのうち、斜め方向のハケを施している可能性がある。底部調整はみられないが、最下段までヨコハケを施す点は特徴的である。黒斑はみられることから窯窯焼成と考えられ、わずかに焼きむらのような変色部分が認められる。32～34は朝顔形埴輪と考えられる細片で、頸部ならびに口縁部の突帯部分と推定した。

図15-35～43は形象埴輪である。いずれも部分的に遺存する細片であり、全容は不明である。35は人物埴輪の腕と考えられるもので、右手で棒状のものを握っているようである。36は断面形が杏仁形の棒状破片で、人物埴輪の一部（美豆良）かと考えるが、不明である。37は外縁が弧状をとる板状の破片に不整形な粘土塊を2か所貼り付けるもので、人物埴輪に伴う琴、あるいは盛矢具と推測するが不明である。38は家形埴輪の裾廻り突帯と考える破片で、上面に壁部分の剥離痕と入口ないしはスリット状の窓部分と思われる痕跡が残る。39は鶏形埴輪の尾部分で、間隔の異なる弧状の線刻が平行に施される。40は平面形が台形となる板状の部位で、細かな線刻による縁取り表現とともに、円形の線刻があり、馬形埴輪の障泥部分と考える。41～43は円筒基部と考えられる破片で、湾曲が緩やかなことから橈円形の個体と考えられる。

図15-44～46は平瓦の破片で、今回の調査で出土した破片はこの3点のみであった。比較的近い箇所で出土しているものの、それぞれ異なる特徴をもつ。調査地の麓に所在する梶原瓦窯の製品と考えられ、奈良時代のものと推測するが、調査範囲内では瓦を伴うような建物（遺構）はみられず、これらの瓦の性格も不明といわざるを得ない。しかし奈良時代にも何らかの土地利用があったことを示唆するものであり、焼土坑を古代火葬墓に関わる遺構とみるならば、これら瓦片が古代火葬墓の構築材であった可能性も想定される。

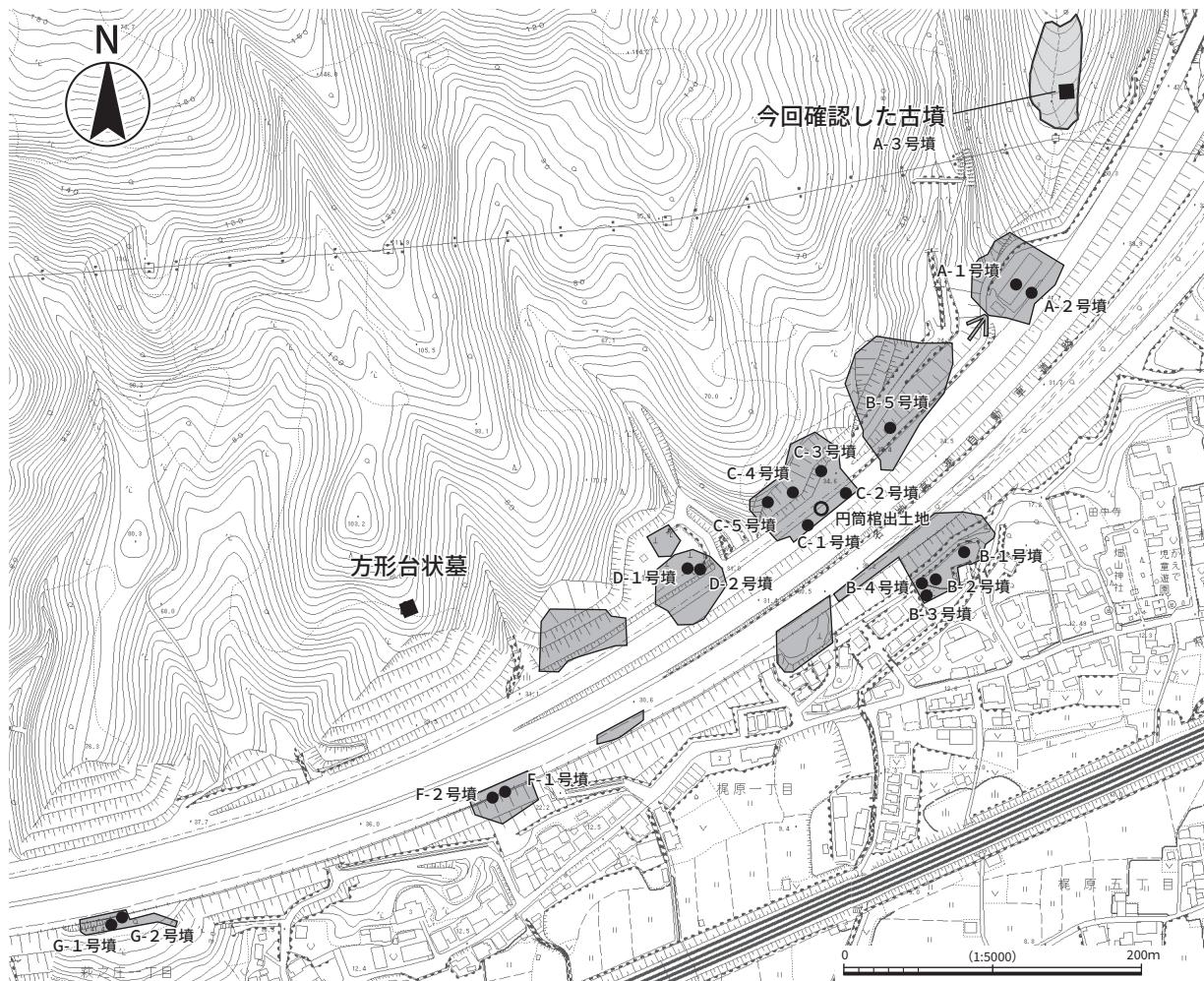
今回の調査では、調査面積に比して遺物の出土量が少なく、伴う遺構も限定されるわけであるが、石製品、埴輪、および須恵器の大部分は6溝、すなわち想定される5世紀後半の小規模方墳に伴うものと考えられる。埋葬施設を含む古墳本体が大きく失われたと想定される中で、一部とはいえ、副葬品ないしは墳丘に配置された可能性の高い遺物が確認されたことは、遺構の性格を推定するうえで重要な位置を占める。また、古墳出土土器の器種・器形構成や、埴輪の生産と流通に関連する研究が進んでいる状況に照らすことで、遺構・遺物に対する評価をさらに広げるものとすることができます。

第5章 総括

前章までに発掘調査における成果を報告してきた。本章ではそれらを総括するとともに、近年の研究成果に照らして梶原古墳群の具体相について評価を加えたい。

6溝と梶原古墳群 今回の調査では時期不詳の焼土坑群を除くと、6溝が遺物を伴う唯一の遺構となった。6溝は丘陵尾根の東縁辺にあり、小規模な溝ではあるが、その内外から石製品、須恵器、埴輪が出土し、その様相から5世紀後半の古墳に伴う遺構の可能性が高いと判断した。6溝の東側は大きく削平を受けているものと推測され、それを踏まえると、一辺10m程度の方墳の周溝の一部と推測されるに至った。もとよりこの推測は、今回の調査成果以外に妥当性を検証できるものではないが、以下、この想定に従い、梶原古墳群の既往の調査成果の中に位置づけたい。梶原古墳群はいわゆる後期群集墳に位置づけられ、主に6～7世紀代の横穴式石室を埋葬施設にもつ小規模墳を主体とするとされる。今回確認した古墳の年代は5世紀後半代に位置づけられ、既往の調査成果（川端1998）からみると時期的に大きくさかのぼる。またA支群の古墳が分布する尾根に連続するとはいえ、標高差は大きく、地形的な連続性も低い。これらのことから、今回確認した古墳は梶原古墳群の中にあって、他の古墳とは性格を異にする「初期群集墳」あるいは「古式群集墳」を構成する1基と評価できる。現状で1基のみの確認であり、同時期の古墳が群を構成するかは不明といわざるを得ない。しかし、早くても6世紀中頃となる横穴式石室墳とは時期的に連続する可能性は低く、結果的に分布範囲が近接する、時期の異なる群とする理解が妥当であろう。既往の調査ではC支群において時期不明の方墳が2基確認されており、これらが5世紀代にさかのぼり得るものであれば、これも「初期群集墳」のまた別の支群という理解となる。C支群は5世紀初頭頃とされる埴輪円筒棺が確認された位置とも重複し、初期群集墳に内包される埴輪円筒棺となる可能性もある。一方、A支群、D支群では7世紀以降の比較的小規模な横穴式石室が調査されており、6世紀代の横穴式石室墳とは立地を違えている。未調査の範囲や調査以前に失われた古墳の存在を考慮する必要もあるが、現状ではB・C・D・Fの各支群は「後期群集墳」あるいは「新式群集墳」、A支群、G支群は「終末期群集墳」あるいは「終末式群集墳」として類型化できる可能性がある（図16 和田1992、森本2000）。大きくは同一の古墳群を構成しているようにみえても、その内部に後期群集墳を主体としつつ、支群の形で「終末期群集墳」を内包する構造をもつ例は、三島地域においても塚原古墳群や塚脇古墳群でも認められる（森本2000）。また、比較的大型の墳丘や埋葬施設をもち、銅鏡や装飾大刀、馬具などを副葬する古墳（B-1号墳・D-1号墳）を含むB支群・D支群が、他の支群より優勢な被葬者集団であった可能性は高く、梶原古墳群を構成する被葬者集団の中に、時期的にも階層的にも造墓背景をいささか異なる複数の集団が内包されていたものと評価できる。

出土遺物について 6溝を方墳の周溝と推定し、石製品や須恵器、埴輪といった出土品を古墳に関連する遺物群として積極的に評価したい。紡輪（1）、砥石（2）の古墳副葬品としての出土は古墳時代中期以降ままみられるが、一般的な副葬品とはい難く、地域偏差も認められる。紡輪は大阪府、奈良県に出土例が多く（森本編2005）、大阪府内の古墳出土品では法量の近い例が散見され、一定の規格を有していた可能性がある。また、茨木市総持寺古墳群（奥編2005）、太田古墳群（永野編2020）など、初期群集墳からの出土がみられる点も注意される。砥石を副葬する古墳はさらに限定的で、近隣の成合1号墳（廣瀬2013）の例もあるものの、出土例は少ない（鹿野2006）。奈良県では新沢千塚古墳群や



年代と 群集墳の類型	G 地区	F 地区	E 地区	D 地区	C 地区	B 地区	A 地区
3世紀			■ 方形台状墓				
4世紀							
5世紀	初期群集墳 ■				○ 埴輪円筒棺 □ 2号墳 3号墳		■ 今回調査の方墳（3号墳）
6世紀	後期群集墳 ■		● 1号墳			● 1号墳 ● 2号墳	
7世紀		終末期群集墳 ● 1号墳 ○ 2号墳		● 1号墳	● 1号墳 ■ 3号墳	● 3号墳 ● 4号墳	● 1号墳 ○ 2号墳

図 16 梶原古墳群の分布と変遷

石光山古墳群といった、やはり初期群集墳からの出土が目立つ点が注意される。古墳（群）の被葬者との関りは今後も厳密な検証が必要とは考えられるが、一般的には朝鮮半島からの渡来人に関わる副葬品とみる傾向がある。細片ではあるが沈線を施す須恵器片（21）の出土も、これが陶質土器であれ須恵器であれ、渡来人とのかかわりを想起させる遺物である。

一方、他の須恵器や埴輪は古墳からの出土が一般的な遺物といえる。須恵器については甕（20）が原位置に据えられた状況が確認できたことから、須恵器配置の核となる土器とみられ、ほかの須恵器もおおむね6溝内から出土しており、溝の内部に配置されていた可能性が高い。わずかながら接合関係の判明しない破片も残るので、図示した個体がこの遺構に配置された土器の総体ではないとしても、比較的まとまりのある組合せと考えられる。TK47形式段階と判断した須恵器甕1、壺3、腹1、有蓋高坏3～4、蓋坏3という構成は、坏類の数量の多寡はともかくとしても、器台を含んでいない点を除くと、器形としては5世紀代の木棺直葬墳にみられる須恵器の構成と調和的である（北山2018・寺前2018・古屋2011・山田2014）。ただ、今回の調査では破片を含め、土師器は全く出土しておらず、当初より土師器を含まない構成であったのであれば、いささか特徴的な様相といふことができる。

埴輪については円筒埴輪の一部を除くと極細片と化した個体が大部分であり、多くの部位は調査範囲外へ流失したものと考えられる。この点、須恵器と出土状況が大きく異なるところで、前章で推測したように、当初の配置場所の違いに起因する削平過程の差を反映したものと考えられる。円筒埴輪については比較的残りの良い個体（図14－29・30）でおおむねの特徴を把握することができ、既往の研究成果に照らすならば、北摂地域、中でも高槻市新池窯で生産されたとする円筒埴輪の特徴と一致するところが多い（花熊2018・廣瀬2018・木村2021）。とりわけ太田茶臼山古墳のC号陪冢出土例（小浜2005）のものとは類似点が多い。新池窯からはいささか離れた地域の小規模墳に円筒埴輪が供給されている状況は、新知見として注目できる。時期についてはIV期後半（埴輪検討会編2003・2022）と判断され、須恵器の年代とも調和的といえる。形象埴輪についてはわずかな部位で種類を推定したものが多くのもの、種類が多岐にわたる可能性が高く、5世紀後半の小規模な古墳であっても多彩な形象埴輪が用いられる点は、すでに指摘がみられるように特徴的な様相といえる（木村2021）。

被葬者について 古墳一般について、具体的な被葬者名を知ることが難しいことはいうまでもないが、近年発掘調査事例が急増している上牧・梶原地域においては、集落遺跡の消長から被葬者像を想定することも可能であって、すでにその方法による集落と古墳の総合的理義も試みられている（笹栗2016・2021）。今回、これまで知られていなかった時期の古墳が存在する可能性が高まったことで、より踏み込んだ検討も可能となる。梶原古墳群に関わる古墳時代集落としては、近年大規模かつ長期的に集落が営まれたことがあきらかとなった井尻遺跡や上牧遺跡との関連が想起される。上牧遺跡では3世紀後半～6世紀初頭にかけて流通経済活動を主たる生業とする集落が営まれる中で、5世紀初頭～前葉にかけては一時期活動が衰退し、5世紀中葉に復活するとされる。井尻遺跡でもこれと連動するかのような集落展開を示しており（笹栗2021）、梶原南遺跡でも5世紀中葉から後半にかけて土器埋納遺構が増加するという状況がある（森本2022）。これら集落群における5世紀中葉の集落活動の再開と、その主体となった集団の墓域が5世紀後半にあらたに形成されるという理解は調和的である。6世紀以降の横穴式石室墳に造墓が直接継続しない点も、6世紀初頭に集落活動が終焉を迎えるという点と整合する。ひとまず本報告における見通しとしては、上牧遺跡や井尻遺跡、梶原南遺跡で古墳時代中期段階に流通経済活動を担った、渡来人を含むあらたな居住集団を被葬者の候補としておきたい。

以上、既往の調査成果や周辺地域での集落遺跡の調査成果をふまえつつ、簡単な総括を行った。推測に依存する部分も多く、今後の調査・研究に期する部分も多く残されてはいるが、上牧・梶原地域は近年の発掘調査の進展により、集落と古墳を総合的に検討することができる地域として、その重要性がより増していることは疑えない。今回の調査成果が周辺地域のみならず、古墳時代社会の実像をより豊かにするものとして評価・活用されることを祈念しつつ、まとめとしたい。

引用・参考文献

- 奥 和之編 2005『総持寺遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告 2004－2 大阪府教育委員会
川端博明 1998『梶原古墳群発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第4輯
鐘ヶ江一朗 2002「安満山古墳群萩之庄支群Cl号墳の調査」『高槻市文化財年報 平成12年度』高槻市教育委員会
北山峰生 2018「近畿一木棺直葬墓の須恵器ー」『季刊考古学』第142号 雄山閣
木村 理 2021「三島地域における埴輪生産の変遷」『弁天山D4号墳資料集—埴輪・須恵器編ー』高槻市立今城塚古代歴史館
合田幸美ほか 2021『金龍寺境内跡4』高槻市文化財調査報告書第38冊・(公財)大阪府文化財センター調査報告書第310集
小浜 成 2005「太田茶臼山古墳及び陪冢出土の埴輪」『総持寺遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告 2004－2 大阪府教育委員会
小林健太郎 1977「I高槻の自然環境」『高槻市史』第1巻 本文編I 高槻市役所
笹栗 拓 2016「北摂三島の群集墳と成合地区の後・終末期古墳の位置づけをめぐって」『大阪文化財研究』第48号(公財)大阪府文化財センター
笹栗 拓 2021「第6章 総括」『上牧遺跡』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第313集
笹栗 拓編 2021『上牧遺跡』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第313集
三宮昌弘 2015『梶原古墳群』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第259集
鹿野 墓 2006「古墳出土の砥石」『2004年度 共同研究成果報告書』(財)大阪府文化財センター
鹿野 墓 2017『梶原寺跡』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第287集
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
寺前直人 2018「須恵器の儀礼—土師器との規格をとおしてー」『季刊考古学』第142号 雄山閣
永野 仁編 2020『太田遺跡・太田廃寺跡 太田遺跡・太田城跡1』茨木市文化財資料集第73集・(公財)大阪府文化財センター調査報告書第302集
花熊祐樹 2018「摂津における埴輪生産の変遷と展開」『ヒストリア』第271号 大阪歴史学会
埴輪検討会編 2003『埴輪論叢』第4号・第5号 塩輪検討会
埴輪検討会編 2022『埴輪の分類と編年』埴輪検討会
原口正三編 1973『高槻市史』第6巻 考古編 高槻市役所
廣瀬 覚 2018「津門稻荷町遺跡と西摂地域の埴輪」『新発見・西宮の地下に眠る古代遺跡—浮かびあがる武庫郡の中心』大手前大学史学研究所・西宮市教育委員会
廣瀬時習 2013『成合1号墳』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第234集
古屋紀之 2011「土器と土製品の古墳祭祀」『古墳時代の考古学3 墳墓構造と葬送祭祀』同成社
宮崎康雄・富成哲也 2001「安満山古墳群萩之庄支群の調査」『高槻市文化財年報 平成11年度』高槻市教育委員会
森田克行 1981「梶原埴輪円筒棺」『昭和53・54・55年度文化財年報』高槻市教育委員会
森本 徹 2000「北摂地域における栗栖山南古墳群の位置づけ」『栗栖山南墳墓群』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第57集
森本 徹 2022『梶原南遺跡』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第315集
森本 徹編 2005『古墳時代の滑石製品』第54回埋蔵文化財研究集会 資料集
山田俊輔 2014「須恵器を中心とする土器祭式の系譜」『古代』第133号 早稲田大学考古学会
和田晴吾 1992「群集墳と終末期古墳」『新版 古代の日本』5近畿I 角川書店

表1 遺構一覧表

遺構名	地区	エリア	時期	規模(m)	遺構名	地区	エリア	時期	規模(m)
1 燃土坑	L6-4-2J-3i	C域東	古代か	長0.50+ 幅0.63 残深0.09	4 燃土坑	L6-4-2J-3J	C域東	古代か	長0.31+ 幅0.26+ 残深0.03
2 燃土坑	L6-4-2J-3i	C域東	古代か	長0.82 幅0.61 残深0.07	5 燃土坑	L6-4-2J-3J	C域東	古代か	長0.88 幅0.65 残深0.25
3 燃土坑	L6-4-2J-3i	C域東	古代か	長0.74 幅0.40+ 残深0.09	6 溝	L6-4-2J-3i~3j	C域東	5世紀後半	長10.8 幅2.7+ 残深0.8

表2 遺物一覧表

遺物番号	捕団番号	図版番号	器種	器形	時期	法量(cm)		特記事項	登録番号	遺構面・層名	遺構名(エリア)
						口径 (復原径)	器高 (残存高)				
1	13	14	石製品	紡輪(紡錘車)	5世紀	径4.2	厚1.4	石材:蛇紋岩(滑石質) 軸孔0.7cm 重量:33.7g	48	第1面	6溝
2	13	14	石製品	置砥石	5世紀	長(4.2)	幅(2.6)	石材:流紋岩 重量:22.3g	24	第2層	(C域東)
3	13	10	須恵器	甕	5世紀	11.0	10.8	口縁の一部、打ち欠きか	52	第1面	6溝
4	13	10	須恵器	有蓋高環蓋	5世紀	11.9	5.2	5に類似	54	第1面	6溝
5	13	10	須恵器	有蓋高環蓋	5世紀	11.9	5.2	4に類似 8とセットか	53	第1面	6溝
6	13	10	須恵器	有蓋高環蓋	5世紀	12.4	5.4	9とセットか	43,49,82	第1面	6溝
7	13	10	須恵器	有蓋高環蓋	5世紀	11.6	4.9	10とセットか	43,49,82	第1面	6溝
8	13	10	須恵器	有蓋高环	5世紀	10.0	8.8	三方透かし 5とセットか	61,62,63,84	第1面	6溝
9	13	10	須恵器	有蓋高环	5世紀	10.7	9.1	三方透かし 6とセットか	44,49,54,56,58,60, 66,84	第1面	6溝
10	13	10	須恵器	有蓋高环	5世紀	10.0	8.4	三方透かし 7とセットか	60,66,70,84	第1面	6溝
11	13	11	須恵器	坏蓋	5世紀	12.0	5.0	14とセットか	44,59,72,82,84	第1面	6溝
12	13	11	須恵器	坏蓋	5世紀	11.6	4.8		40,67,74,75,76,83	第1面	6溝
13	13	11	須恵器	坏蓋	5世紀	11.8	4.7		50,79,80,83	第1面	6溝
14	13	11	須恵器	坏身	5世紀	9.8	4.9	11とセットか	50,75,76,79,83	第1面	6溝
15	13	11	須恵器	坏身	5世紀	10.1	4.7	底部外面ヘラ記号(一文字)	44,49,72,78	第1面	6溝
16	13	11	須恵器	坏身	5世紀	10.8	5.1		71,74,76,78,83	第1面	6溝
17	13	11	須恵器	壺	5世紀	(14.4)	18.6		19,35,40,44,50,75, 76,80,8319,35,40, 44,50,75,76,80,83	第1面	6溝
18	13	11	須恵器	壺	5世紀	14.6	(21.0)		19,35,40,44,50,55, 68,69,77,80,81,83, 84	第1面	6溝
19	13	11	須恵器	壺	5世紀	14.8	24.9		40,44,50,64,65,70, 73,74,75,76,78,79, 80,83,84	第1面	6溝
20	13	11	須恵器	甕	5世紀	22.4	48.0	口縁の一部、打ち欠きか	49,54,56,57,62,84	第1面	6溝
21	13	14	須恵器	甕(体部片)	5世紀	長(4.8)	幅(9.3)	外面格子タタキ+螺旋状沈線か	20	第2層	(B域東)
22	13	14	須恵器	壺(底部片)	奈良	台径(8.2)	(1.9)		98	第2層	(侵食谷)
23	14	13	円筒埴輪		5世紀	長(9.4)	幅(12.1)	ヘラ記号(円形?)	43	第1面	6溝
24	14	13	円筒埴輪		5世紀	長(5.5)	幅(7.2)	天地不明 試掘調査出土	8	排土	
25	14	13	円筒埴輪		5世紀	長(9.1)	幅(9.2)	天地不明	36	第1面	6溝
26	14	13	円筒埴輪		5世紀	長(5.8)	幅(5.6)	天地不明	43	第1面	6溝
27	14	13	円筒埴輪		5世紀	長(5.3)	幅(7.0)	天地不明	36	第1面	6溝
28	14	13	円筒埴輪	(底部片)	5世紀	長(9.1)	幅(9.4)		33	第2層	(C域東)
29	14	12	円筒埴輪	普通円筒	5世紀	(27.8)	(25.4)	突帯間隔11cm 30と同一個体か	39,43,51	第1面	6溝
30	14	12	円筒埴輪	普通円筒	5世紀	底径(14.8)	(15.2)	底部高8.5cm 29と同一個体か	43,51	第1面	6溝
31	14	12	円筒埴輪	普通円筒	5世紀	底径17.5	(13.1)	底部高8.0cm	38,39,41,42,43	第1面	6溝
32	14	13	円筒埴輪	朝顔形	5世紀	長(5.1)	幅(6.2)		86	第2層	(東斜面)
33	14	13	円筒埴輪	朝顔形	5世紀	長(3.1)	幅(3.6)		16	第2層	(C域西)
34	14	13	円筒埴輪	朝顔形	5世紀	長(5.5)	幅(7.3)		39	第1面	6溝
35	15	13	形象埴輪	人物(腕)	5世紀	長(6.8)	幅(3.3)	棒状のものを握る右腕	39	第1面	6溝
36	15	13	形象埴輪	(美豆良)か	5世紀	長(4.2)	幅(3.1)	断面杏仁形 類似する2片	34,40	第1面	6溝
37	15	13	形象埴輪	盛矢具か	5世紀	長(11.3)	幅(6.0)	やや湾曲する平坦な器物	49	第1面	6溝
38	15	13	形象埴輪	家形か	5世紀	高(4.2)	幅(7.8)	窓もしくは入口 褶廻突帯か	97	第2層	(C域西)
39	15	12	形象埴輪	鶏形	5世紀	長(9.6)	幅(11.4)	尾羽片 試掘調査出土	2	第2層	(C域西)
40	15	13	形象埴輪	馬形(障泥)か	5世紀	長(11+)	幅(13.4)	平面台形の板状 線刻による縁取り 円形の線刻	39,43	第1面	6溝
41	15	12	形象埴輪	円筒基部	5世紀	長(10.8)	幅(14.8)	試掘調査出土	4	第1面	6溝
42	15	12	形象埴輪	円筒基部か	5世紀	長(4.1)	幅(6.5)		23	第2層	(B域東)
43	15	12	形象埴輪	円筒基部	5世紀	長(6.5)	幅(9.3)		28	第2層	(C域東)
44	15	14	瓦	平瓦	奈良	長(20.4)	幅(10.8)	内面:布目圧痕 外面:繩目タタキ	91	第2層	(C域西)
45	15	14	瓦	平瓦	奈良	長(7.1)	幅(8.0)	内面:布目圧痕	92	第2層	(C域西)
46	15	14	瓦	平瓦	奈良	長(8.1)	幅(8.2)	内面:布目圧痕 外面:格子タタキ	92	第2層	(C域西)
47	—	14	須恵器	坏蓋	5世紀				98	第2層	(侵食谷)
48	—	14	須恵器	坏蓋	5世紀				27	第2層	(B域西)
49	—	14	須恵器	坏蓋	5世紀				27	第2層	(B域西)
50	—	14	須恵器	高环	5世紀				34	第2層	(C域東)
51	—	14	須恵器	坏身	5世紀				90	第2層	(南斜面)
52	—	14	須恵器	高环	5世紀				97	第2層	(C域西)
53	—	14	須恵器	高环	5世紀				11	第2層	(C域西)

写 真 図 版

図版1 調査地の景観



梶原古墳群遠景（南から）



調査地より枚方面を望む（北西から）

図版2 全景



全景（調査着手前 北西から）



全景（北西から）

図版3 全景



全景（垂直写真 上方が北）

図版4 全景・層序



全景（北から）



土層断面 左上・右上：尾根稜線上（東から） 左下：尾根頂部平坦面付近（南から） 右下：東斜面（南から）

図版5 遺構



左上：1 焼土坑 右上：1 焼土坑埋土断面 左下：2 焼土坑 右下：2 焼土坑埋土断面（いずれも南から）



左上：3 焼土坑埋土断面 右上：4 焼土坑埋土断面 左下：5 焼土坑 右下：5 焼土坑土層断面（いずれも南から）

図版6 遺構



6溝（北から）



6溝 埋土断面 左上：A-A' 断面 右上・左下：C-C' 断面 右下：D-D' 断面（いずれも南東から）

図版7 遺構



6溝 遺物出土状況（北から）



6溝 遺物出土状況（A-A'断面の北側 東から）

図版8 遺構



6溝 遺物出土状況（A-A'断面とB-B'断面の間 北から）



6溝 遺物出土状況（C-C'断面の南側 南から）

図版9 遺構



6溝 遺物出土状況（中央付近 須恵器甕 20 北から）



同上 左上：上面検出時 右上：口縁片除去後 左下：有蓋高坏蓋検出時 右下：最下部（いずれも東から）

図版 10 遺物



図版 11 遺物



図版 12 遺物



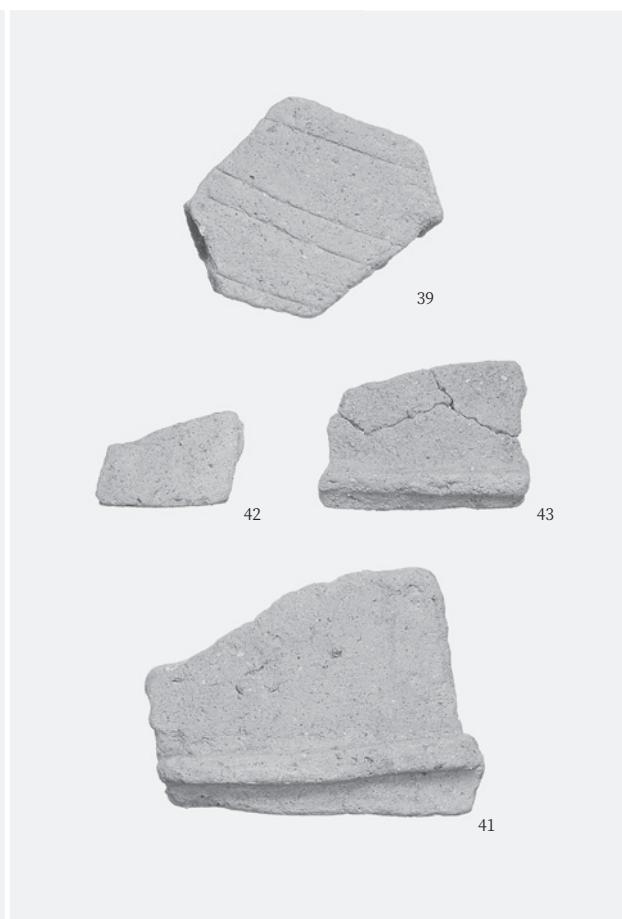
31



30



29



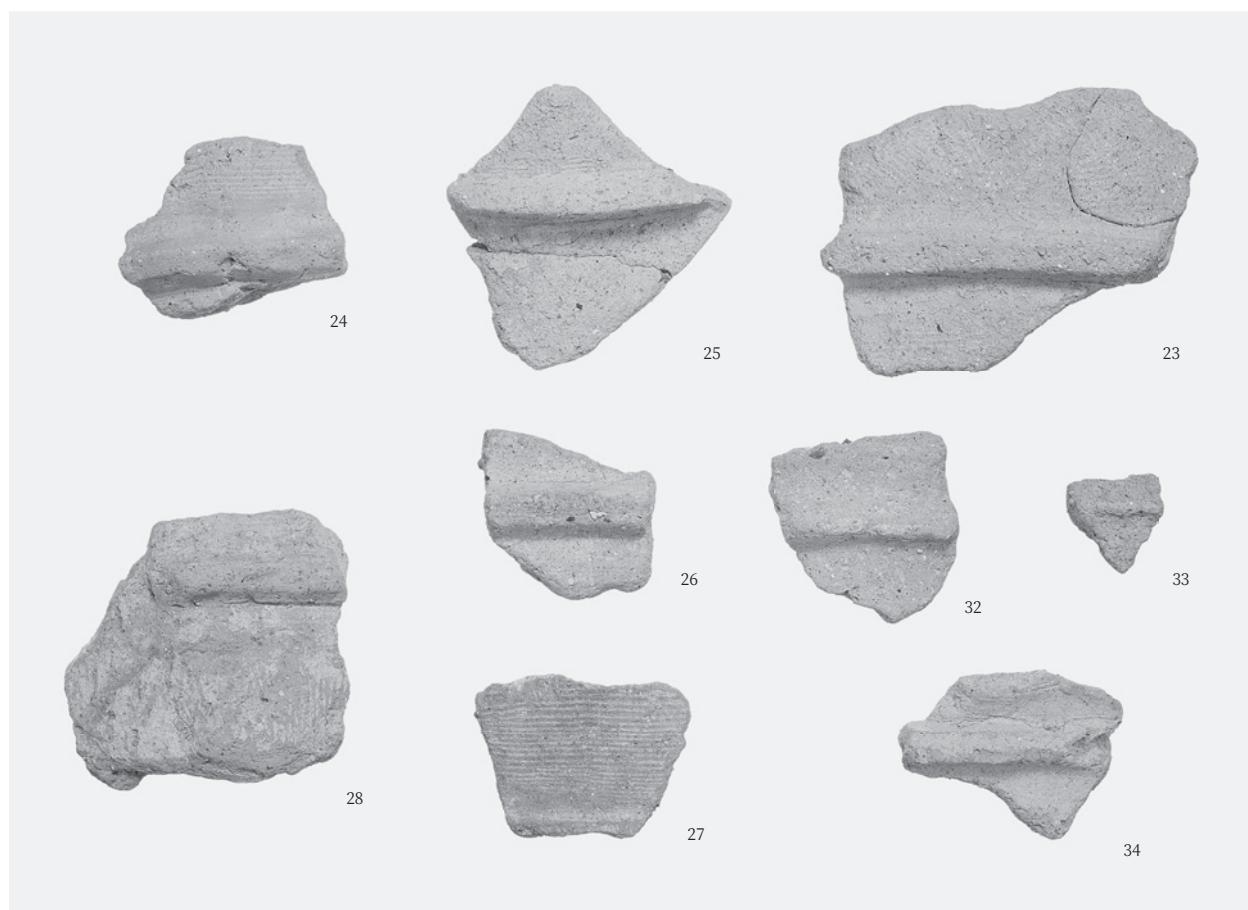
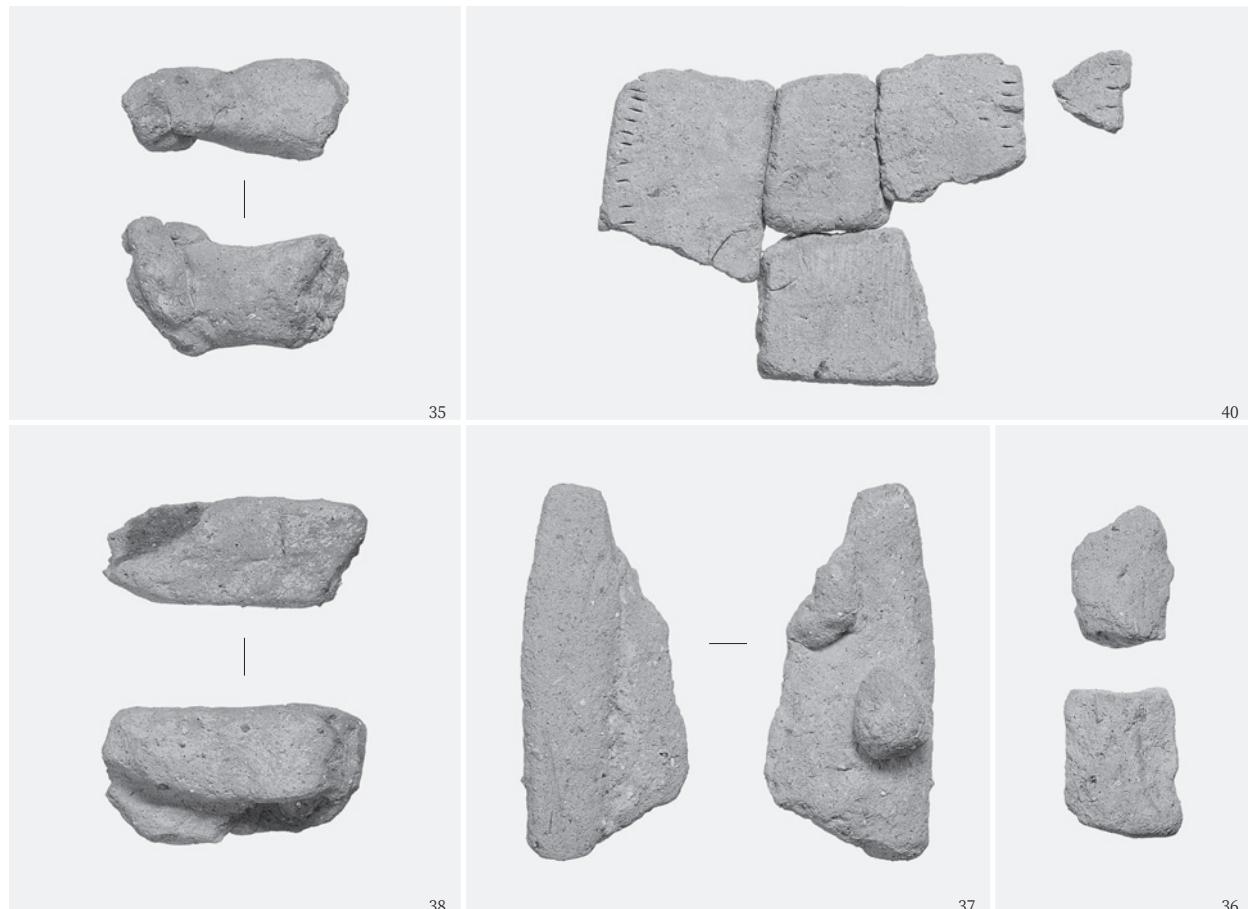
39

42

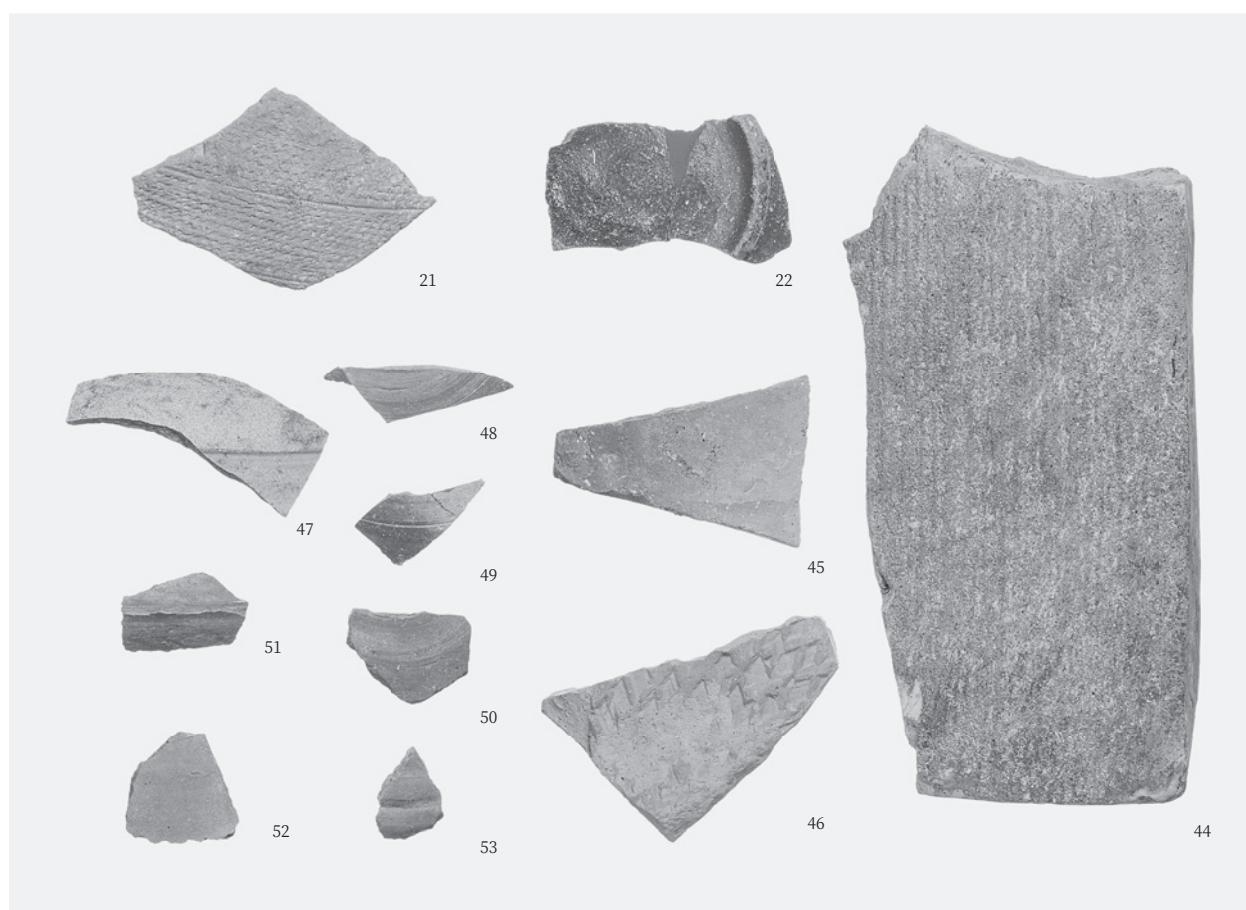
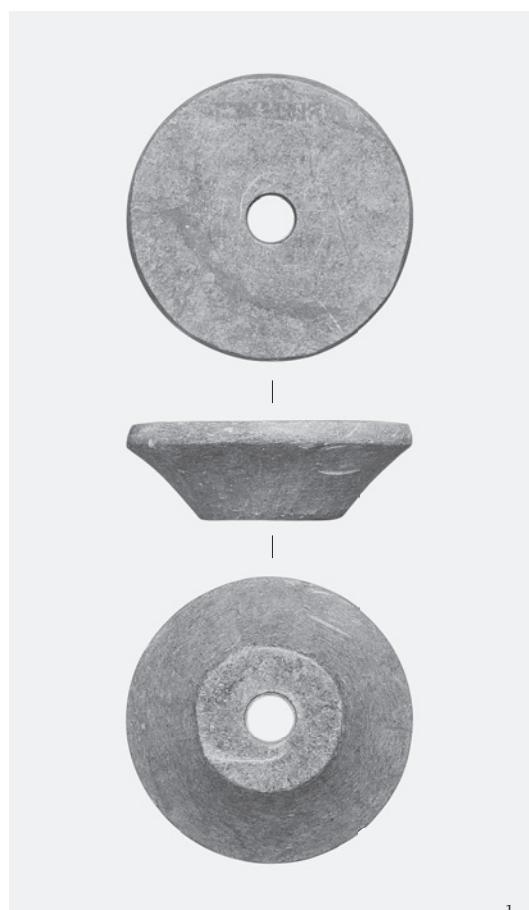
43

41

図版 13 遺物



図版 14 遺物



報 告 書 抄 錄

ふりがな	かじはらこふんぐん2						
書名	梶原古墳群2						
副書名	高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次数							
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター 調査報告書						
シリーズ番号	第323集						
編著者名	森本 徹						
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL 072-299-8791						
発行年月日	2022年10月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡 番号						
かじはら 梶原古墳群	おおさかふ たかつきし 大阪府高槻市 かじはら 梶原	27207	31	北緯 34° 52' 6" 東経 135° 38' 55"	2022年1月1日 ～ 2022年4月28日	2,080 m ²	新名神高速 道路建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
梶原古墳群	墳墓	古墳時代 (5世紀)	溝(古墳周溝の一部か)		石製品・須恵器・埴輪	墳丘の大部分を削平された一辺10m程度の方墳の可能性	
	その他	奈良時代か	焼土坑			古代の火葬関連施設の可能性	
要 約	<p>北摂山地から派生する尾根の稜線付近で古墳時代中期後半(5世紀後半)の須恵器・埴輪を含む溝1条を検出した。周辺の地形から、墳丘の大部分を削平された一辺10m程度の方墳と推定できる(梶原古墳群A-3号墳と命名)。埋葬施設も遺存していないものと思われ、わずかに滑石製紡輪(紡錘車)と流紋岩製砥石に副葬品の可能性を残す。墳丘に配置された可能性の高い埴輪と、周溝に配置された可能性の高い須恵器が出土。埴輪は北摂地域特有の製作技法を持ち、形象埴輪は細片しか遺存していないが種類は豊富。1基のみの確認にとどまるが、5世紀後半に形成された初期群集墳に類別できる。</p> <p>遺物を含まざ年代も不明な焼土坑5基を検出した。周辺地域の事例から古代火葬墓に関わる火化施設の可能性がある。</p>						

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第323集

梶原古墳群2

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2022年10月31日

編集・発行／公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号
印刷・製本／株式会社 明新社
奈良市南京終町3丁目464番地